東北大学東北アジア研究センター

外部評価 2015

2016 年 10 月 31 日

東北大学東北アジア研究センター

外部評価 2015

2016 年 10 月 31 日

目　次

東北アジア研究センター外部評価 2015　外部評価委員名簿 …… 1
外部評価実施の経緯 …… 2
評価報告書 …… 3
評価座談会記録 …… 12

東北アジア研究センター外部評価 2015　外部評価委員名簿

○国内委員　3名

宇野　伸浩　　（広島修道大学人間環境学部教授）

江淵　直人　　（北海道大学低温科学研究所　所長・教授）

堀江　典生　　（富山大学極東地域研究センター　副センター長・教授）

外部評価実施の経緯

東北大学東北アジア研究センター外部評価 2015 の外部評価委員会は、平成 27 年 8 月に 同センターの岡洋樹センター長よりの委嘱を受け、広島修道大学人間環境学部教授の宇野伸浩氏、北海道大学低温科学研究所所長・教授の江淵直人氏、富山大学極東地域研究センター副センター長・教授の堀江典生氏が担当することになった。

同年 8 月には、外部評価委員会は、『東北大学東北アジア研究センター・活動報告 2014』ならびに同センターホームページ掲載資料等による検討を開始した。そして 2016 年 3 月 29 日には、3 名の委員がセンターを訪問し、外部評価座談会と施設見学を行い、センター側からの補足説明とそれへの質疑、そして総合評価のための討議を行った。

以下に掲載するものは、外部評価委員による評価書および外部評価座談会における記録である。なお､東北アジア研究セータの研究活動活動についての外部研究者による評価は、これとは別に、共同研究及び研究ユニットの活動に対する研究モニターによる年度報告書がある。これについては、毎年刊行される自己評価報告書に掲載しているため、本誌では省略する。

2012-2014 年度　東北大学東北アジア研究センター外部評価報告書

2016 年 4 月 10 日作成

評価委員氏名 宇　野　伸　浩	所属・職	広島修道大学人間環境学部

〔1〕 理念・目的・目標について

報告書の理念・目的に関する２０１４年度の文章は、２０１２～１３年度に比べて、理念、研究方針、重点戦略を簡潔に文章にまとめ、工夫をされたことがよくわかり、理念や研究方針、重点戦略が明確になった点を評価します。

ただ、理念に関する文章の中では、「地域理解」と「課題解決」を併記されていますが、研究方針以降の文章では、「地域理解」が強調され、最終目標は「地域理解」のみに置かれているように読めます。東北アジアの各地域の課題を実際に解決するのは、各地域の人々であり、東北アジア研究センターが課題を直接解決することはできないことが多いのは確かですが、「各地域の課題解決に研究面から貢献・寄与する」というような表現も可能ではないでしょうか。例えば、大気汚染に関する研究は、地域理解のためであるというより、地域課題の解決のための研究面からの貢献であると思います。

〔2〕研究活動について

組織構成については、基礎研究部門とプロジェクト研究部門の 2 段階とし、主として研究者自身の研究分野における研究は基礎研究部門において、学際的研究あるいは社会貢献につながる研究はプロジェクト研究部門において実施されていることは、一つの工夫であり、プラスに評価したいと思います。

東北アジア研究センターの研究活動については、報告書を読ませていただき、下記の特色あるいは強みがあると考えました。

１）センターの成り立ちの経緯から文理両分野の研究者から構成され、文理連携・融合の学際研究を推進できる環境にあること

２）旧社会主義圏のロシア、モンゴル、中国を含む東北アジア地域を研究の対象とし、社会主義圏崩壊後の激変する地域社会の研究は学術的意義が高いとともに、対象とする地域社会に研究成果を還元することに意義があること

３）東北アジア地域を対象とした各種の環境関係の研究があり、社会的意義があること

４）2011 年の東日本大震災以後、震災関連研究が加わり、災害研究が東北アジア研究センターの新たな特色となり、社会貢献の意義も大きくなりつつあること

１）文理連携・融合研究としては、「氷融解洪水とその社会的対応からみる極北圏地域社会の比較研究」「震災復興のための地中レーダーによる遺跡探査推進」を成功例として評価したいと思います。白頭山巨大噴火の研究、十和田火山平安噴火の研究も、文理連携・融

合研究として興味深いと思います。文理連携・融合研究を成功させるのは容易ではありませんので、いくつか試みた中でひとつでも成功すればよいのではないでしょうか。核となる研究者がどれだけ文理両分野に通じているかが重要ではないかと考えます。

２）旧社会主義圏に関する研究については、中国研究、モンゴル研究、ロシア研究がそれぞれ別々に進められているように見えますので、進め方によってはもう少しまとまった強みになるように思われます。その点、科学研究費による研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」が国境地帯における移動・移住・移民に注目し国際シンポジウムを開催したこと、共同研究「華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究」が『僑郷』を出版したことはひとつの成果であり、グローバル化が進む現在、人的移動の歴史的・社会的研究の意義は高いと思われます。また、「典籍文化遺産の研究」「伝統的モンゴル語辞書の研究」は研究の基礎となるデータの調査と公開であり、学界への貢献と対象地域への研究成果の還元という点で評価されると思います。

３）環境関連研究には、共同研究として「森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット」「中国における石炭消費削減策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性」「PM2.5を中心とした東アジアにおける越境大気汚染に対処するための外交戦略関する研究」があり、個人研究としても、琉球列島・小笠原における外来種の研究、ブルーギルのエサ資源の解析、大阪地域の屎尿をめぐる近世社会の研究があり、東北アジア研究センターの特色のひとつであると思われます。

４）震災関連研究としては、上廣歴史資料科学研究部門の研究活動があり、共同研究として、「震災復興のための地中レーダーによる遺跡探査推進」「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」「東日本大震災被災地域における宗教活動と社会的多様性に関する調査研究」があり、高く評価したいと思います。個人研究の「近世後期における災害と資源利用―飢饉と温泉―」も興味深い成果であると思います。今後も東北アジア研究センターのひとつの強みとして発展させていかれることを期待します。

〔3〕教育活動について

教育活動については、積極的に公開講座などを開催し、研究成果を社会に発信・還元していることを高く評価します。とくに、震災関係の研究成果を、公開講座などを通じて社会に還元することは、社会的な意義が大きいと考えます。

研究者の養成につながる大学院生を対象とした教育は、センターの重要な役割であると思います。その際、学際的研究において、大学院生、若手研究者がどのような役割を担うのがよいかは難しい問題であると思います。大学院生、若手研究者にとって、まずひとつの研究分野において研究方法と方法論をしっかり修得し、その分野において一人前の研究者として認められることは、必要なことであり、その上で学際的研究に従事し、研究者としての幅を広げることは、プラスになると考えられます。反対に、大学院生の段階で学際的研究に従事し、中途半端な研究に終わり、どの分野からも評価されないことになると、

その研究者にとっては苦しい状況になります。難しい点でありますが、若手研究者育成と学際的研究推進の両立するために、考慮すべき点であると思われます。

〔4〕将来構想について

将来構想は、まず東北アジア研究センター内部に将来構想を検討する委員会などで継続的に検討し、原案を作成した上で外部評価委員の意見を聞く方がよいように思われます。

現在の東北アジア研究センターは、分野的には理学的・人文学的研究が多いですが、今後、政治学・法学・経済学・工学などの実学的分野をもう少し強めていくのか、あるいは、現状のままで行くのかは、検討の余地があるかもしれません。ただ、東北アジア地域に関する他の研究所との違いを考え、東北アジア研究センターとしての特色・強みを失わないことを望みます。

災害研究は、すでに東北アジア研究センターの特色ある研究となっていますので、今後文理連携・融合の研究として、あるいは学際的研究として、さらに発展することを期待します。その蓄積を生かし、中国・ロシアで発生した災害や災害からの復興に関する研究に発展することも考えられると思います。

〔5〕総合評価（活動全般、前回の外部評価での指摘点の達成状況など、ご意見をお書きください。）

総合評価としては、東北アジア研究センターの 2012～2014 年度の活動は、全体としてレベルの高い研究・教育活動が維持され、多くの研究成果が得られたことは、高く評価できると考えます。

前回の外部評価においては、文理連携・融合研究が課題としてあげられていましたが、いくつかのユニークな文理連携・融合研究が進んでいると思います。災害研究は、前回の外部評価の時からさらに発展し、優れた学際的共同研究と社会貢献がおこなわれ、その社会的意義は大きいと思います。

その上であえて言うならば、東北アジアの各地域における社会的・文化的・経済的・生態的変化は激しく、その中で様々な課題・問題が生じていますが、それに対して、その課題・問題解決に研究面において貢献する、あるいは問題の存在やその拡大を警告するような研究を増やしていくことができれば、より評価が高くなると考えられます。

また、学際研究をどのように評価するかが座談会で話題になりました。研究としての完成度よりも、研究としての発展の可能性を評価する基準を、東北アジア研究センターが独自に持つことが必要であるかもしれません。たとえ現段階での研究成果が小さく不完全であったとしても、将来的に一つの新しい研究分野を生み出すような第一歩があれば、その評価は高くすることが必要であるように思います。ただ、その判断は難しい場合が多いかもしれません。

平成２７年度　東北大学東北アジア研究センター　外部評価報告書

平成２８年３月３０日作成

評価委員氏名 江淵　直人　　印	所属・職	北海道大学低温科学研究所・所長

〔1〕 理念・目的・目標について

東北アジア地域を対象として，文系・理系の連携による学際的な地域研究を推進する，という東北アジア研究センター（以下，「センター」と略します）の理念は，社会的な要請に的確に対応するものであると認められます．また，2014 年度以降，東北大学のグローバル・ビジョンに対応し，センターの機能強化の方向性をより具体的に「重点戦略・展開施策」としてまとめた点は大いに評価すべきと考えます．環境や災害など，比較的文理連携が進めやすい対象を選び，対象地域を絞って研究を進めることにより，国際的な研究拠点としての機能をさらに発展させることが期待できると思います．この拠点から，既存の学部・研究科などではなし得ないユニークな研究が育つことを期待します．

〔2〕研究活動について

センターの各専門分野での研究成果には，私が理解できる範囲でも，優れたものが数多く見られます．しかしながら，文理連携型研究のアウトプットは必ずしも多いとは言えない印象を持ちました．特に，プロジェクトユニットへの理系分野の研究者の参加が少ないように思われます。その中において，高倉浩樹教授の「災害と地域文化遺産」，佐藤源之教授の「減災と電波科学」のユニットは，学際的なアプローチによる地域研究として，注目すべき取り組みであると評価します．

短期的な研究成果やその評価を考えると，学際的研究や文理連携研究は，必ずしも効率的に成果が挙がるものではないと思います．しかしながら，センターの存在意義を考えると，既存の学問分野の縦割り的な境界を越えた新しい研究分野の開拓こそが重要であると考えます．1996 年の設立以来，20 年にわたって培ってきたセンターの学際的研究・文理連携研究を指向する土壌を生かして，新しい地域研究の形を創出することを期待します．

科研費を含む外部資金の獲得状況は，非常に高いレベルにあると認められます．また，共同研究の実施状況，刊行物・書籍等や講演会・シンポジウム・研究会などのアクティビティも，センターの規模に比べて非常に高く，国内の研究者コミュニティのリーダーとしての機能を十分に果たしていると考えられます．海外からの客員教員・研究員受入や海外学術機関との協定締結なども積極的に行われており，国際的な研究拠点としても重要な役割を果たしていることは明かです．

〔3〕教育活動について

大学院生を含む若手研究者の人材育成もセンターの大きなミッションの一つであると考えます．センターとしては学生定員を持たず，各研究科の協力講座として，それぞれの研究分野での教育を行っていますが，センター所属の大学院生の数は，このような状況を考えれば適正な規模と言えると思います．

センターの毎年度の「活動報告」には教育に関するデータがあまり詳しく載せられていないようです．センターの教育面での貢献を示すために，大学院生の学年構成や留学生数，研究テーマ，学位取得状況等，もう少し詳細なデータを掲載してもよいのではないかと考えました．

大学院教育においては，まずはそれぞれの研究分野を極めることが基本であると思いますが，学際的なセンターの研究環境を生かして，より広い視野を持ち，将来的には，文理連携研究の分野で活躍できる人材を育てる試みにも期待します．その取り組みの一つとして，学生研究交流会を毎年開催し，院生間の交流・意見交換を図っている点については評価できます．

〔4〕将来構想について

国立大学の運営交付金削減の流れの中で，センターの研究・教育活動をいかに発展させていくか，が，センターの近い将来の構想を考える上で大きな課題となると想定されます．基礎研究部門の研究分野の整理が，ある程度必要になるかも知れません．非常に難しい注文ではありますが，センターの学際的な特徴を後退させることなく，さらなる機能強化を果たす方策を見いだすことを期待します．センターが，文理連携の学際的な北東アジア地域研究の拠点として，国内の研究者コミュニティをリードする立場に立ち，かつ，国際的な研究交流のハブとしての機能を今後さらに発展させることが必要であると考えます．また，同時に，センターが国内外の優れた研究者と連携し，共同研究を効果的に展開することによって，センターの構成員だけではカバーしきれない研究分野を取り入れた新しい研究が創出できるものと思います．

〔5〕総合評価（活動全般、前回の外部評価での指摘点の達成状況など、ご意見をお書きください。）

センターの研究・教育活動全般を総括して，この３年間において，センターのミッション達成に向けて努力を続け，期待通りの成果を挙げていると評価します．繰り返しになりますが，今後も，センターが，文理連携の学際的な地域研究の先導的な役割を果たし，後に続く文理連携研究の取り組みのよい見本となることを期待します．

最近，国立大学の文系学部のあり方が問われる中で，地方大学を中心に，文理連携を標榜した組織改革が数多く見られます．しかしながら，その中には，実質的な研究・教育の中身の議論が浅く，形だけの連携の提案にとどまっているものも少なくないと感じてい

ます．文理融合や文理連携は，これまでにも何度もブームになり，その度に多くの失敗を重ねてきた歴史があると思います．その中で，センターは，一貫した姿勢を保って文理連携の研究を進めてきたてきた全国的にも数少ない成功例であると考えます．

研究分野が異なれば，「研究成果」の定義すら異なることがあります．そのような状況の下で，学際的な研究のプロジェクトやユニットの作り方，アウトプットの出し方・見せ方とその評価の方法など，既存の各研究分野の方法論が通用しないことが少なくないと思います．センターには，学際的・文理連携の取り組みの先導者として，これらの方法論を含めて，学際的・文理連携地域研究の成功例を，研究者コミュニティに示していただきたいと思います．

大学附属の研究所・センターにおける研究テーマの選択においては，常にトップダウンとボトムアップの配合割合が問題になると思います．センターとしてのミッションに沿ったトップダウン型の研究と個々の研究者の自由な発想に基づくボトムアップ型の研究をいかにうまくブレンドして，センターの研究成果としてまとめ上げていくか，は難しい課題だと思います．文理連携や学際的研究をセンターの構成員全てに強制することは適当ではないと思います．しかしながら，個々の構成員がセンターのミッションを理解し，常に意識して，研究テーマの設定や共同研究の立案に反映させていくことは重要です．この点では，現在のセンターにおける，プロジェクトユニットの形成のメカニズムは，比較的うまく機能していると見受けられます．「重点戦略・展開施策」として打ち出したセンターの具体的な方向性が，今後さらに浸透し，研究の発展につながることを期待します．

年度　東北大学東北アジア研究センター　外部評価報告書

2016 年　4 月　5 日作成

評価委員氏名 堀江　典生　　印	所属・職	富山大学極東地域研究センター 教授

〔1〕 理念・目的・目標について

活動報告 2012 年度版と 2013 年度版と比べ，東北アジア研究センター（以下，センターと略称）は理念と目的をより明確に定義しています。こうした理念と目的の明確化へのたゆまない努力は，高く評価されるべきものであると考えます。世界最高水準の研究創造，国際的連携のもとでの研究創造，東北アジアという新たな地域概念の構築を掲げ，その東北アジア地域研究の拠点として機能していくことを唱うとともに，それに向けた取り組み方針を明記している点は，これまでの活動報告に比べ，より挑戦的で具体的であると高く評価できるでしょう。これらの実現をどのような形で実現していくのか，どのような評価基準で今後それを評価していくのか，今後の課題になると考えられます。

〔2〕研究活動について

プロジェクト研究ユニットは，センターがどのような課題に取り組んでいるかがわかりやすく，それによりセンターの研究の特色をイメージしやすくなっています。また，常に新たなユニット形成を行っている点は，研究組織・テーマを社会のニーズに合わせて変更していく努力ともなり，その柔軟性は高く評価できるように思います。

ただ，それぞれのユニットがどのような成果を得たのかについては，ユニットごとに濃淡があり，より十分な説明が求められます。たとえば，国内外の連携を，機関名だけでなく，どのような研究者人材との連携においてなされているかが示されれば，ユニット研究の重層性をより明示できるのではないかとの印象ももちました。

センターは，常に文理融合や文理連携という学際性が求められてきました。センター外部評価委員会の席上では，この文理融合や文理連携に関する議論に多くの時間が割かれました。プロジェクトの学際性は，研究課題そのものが求める学際性でなければならず，なにがなんでも文理融合・文理連携でなければならないという理由はありません。また，文理融合という言葉は，異なるディスシプリンに基づく研究を一つの研究，ひとつの論文で融合させるかのような印象を与えます。これはどのような研究課題でもできるというものではありません。過去 3 年間の活動報告の記録を拝見すると，センターの説明として文理融合という言葉は使われておらず，常に文理連携という言葉が使われていることに気がつきます。文理連携は今後も東北アジア地域研究において強く求められますが，文理融合が必須でなければならない理由はないように思います。それゆえ，文理融合ではなく文理連携として地域研究の課題そのものが求める学際性に真摯に向き合おうとするセ

ンターの姿勢は評価できるように思います。また。学際性は，研究者個人が学際的たろうとする場合もあり，また，外部研究者を巻き込むことで学際性を形成することもあろうかと思います。国内外の研究者との連携を深めているとこれまでの活動報告であるように，東北アジア研究の拠り所として，文理にまたがるセンターの教員構成に裏打ちされた国内外の研究者との連携が学際性を高めていくものと期待できます。センター全体として，また，プロジェクト研究ユニットとして，研究課題に即した文理連携を具体的にどのようにマネジメントできるか，その説明が今後求められることと思いますし，今後の展開に期待したいと思います。

研究の中身については，後に「将来構想について」で述べるように，東北アジア地域研究の中心的な課題にバランスよく取り組まれていると判断できます。また，震災の経験を生かして，防災研究に取り組まれているところなどは，東北大学らしい視点であると感じます。ただし，東北アジアという地域枠組みでは収まらない研究もあり，それらの位置づけもまた，今後の課題になっていくものと感じます。

機関誌『東北アジア研究』が東北アジア地域研究にとって高いクオリティの論文を掲載する機関誌として発展していくことが望まれます。現状では，まだ国内の多くの研究者が投稿を目指すという機関誌の位置づけには至っていないように思います。また，機関誌の運営についても，改善の余地がまだあるように感じます。たとえば投稿締切日から発行まで比較的長い期間が確保されています。査読過程に特に説明がないので，成果をいち早く公表したい若手研究者にとっては投稿しにくい設定となっているように思います。また，査読者候補を投稿者自身が提出するといった規定は，査読者に投稿者が誰であるかを伏せ，投稿者にも誰が査読者になっているかを伏せるダブルブラインドが多くの地域研究機関で発行される機関誌でも一般的であることを考えれば，投稿者が査読者を恣意的に選択する余地があり，公正な査読が保証されないのではないかとの懸念があります。

〔3〕教育活動について

センター教員が協力研究科の講座で教育に取り組んでいることは，センターの研究を教育に還元する意味において，意義は高いと思います。本来，センターにとって教育活動は主務ではないことを考慮すれば，すでに十分な貢献を行っていると評価することができます。

センターの研究成果が若手研究者育成にどのように貢献できているか，貴学院生だけでなく，広く若手研究者という枠組みでの視点が重要になるように思います。貴学諸学部および研究科における教育活動のみを評価対象にするよりも，センターの諸事業への若手研究者の参与もまた意義のある説明になるのではないでしょうか。

センターでは，様々なプロジェクトによるセミナーやシンポジウムでの発表に若手研究者の参加も散見されます。また，プロジェクトには，日本学術振興会特別研究員の参加も散見されます。その意味で，センターが若手研究者育成に貢献してきたのではないかと推察できます。

〔4〕将来構想について

東北アジアは，中国の政治的・経済的台頭とそれに伴う環境問題，極地・北極圏航路の出現，日本を取り巻く二国間関係の脆弱性などが，大きなテーマになっています。中国を発信源とする大気汚染の問題，北極圏の環境学および人類学的研究，中国，モンゴル，ロシアなどの歴史理解などに関わるプロジェクトが形成されていることは，この地域が求める課題にしっかりと対応していると判断することができます。また，東北アジア（北東アジア）という地域概念がいまだ明確に定着していないなか，21 世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニットのように東北アジアとは何かを問い続ける研究は，センターの基軸的な研究であり，それにも継続的にしっかりと取り組んでいるとの評価ができます。こうした課題に今後とも誠実に向き合っていくことこそ，センターの発展にとって重要なことではないかと判断します。

〔5〕総合評価（活動全般、前回の外部評価での指摘点の達成状況など、ご意見をお書きください。）

東北アジア地域にとって重要な課題をバランスよくプロジェクト研究ユニットに配置し，内外研究機関・研究者との連携を深め，活発な社会貢献事業を実施している点，総合的に高く評価できます。むしろ，研究機関としては研究から教育，社会貢献まであまりにも幅広い活動を濃密に行っている現状を見れば，研究以外の活動がそれぞれの研究スタッフの研究時間を制約するものになっていないかとさえ，心配するほどです。

貴センターには，歴史・文化・環境・防災に強いセンターとしての特色があると思います。逆に言えば，現代の東北アジアで不安定な二国間関係，北朝鮮問題，中国の海洋進出など国際政治・安全保障上の問題，さらには中国の「一帯一路」や韓国が唱える「ユーラシア・イニシアチブ」などといった東北アジアを巻き込む地域経済圏創成の問題など，極めて現代的な政治経済的課題への取り組みでは目立った研究活動は見られません。ただし，地域研究機関が，すべての課題に対応したスタッフやプロジェクトを揃えることは不可能ですし，そうすることで逆にセンターの特色が失われる危険性もあります。センターの強みを活かし，東北アジア地域という地域特有の文脈が求める研究課題に柔軟に対応してプロジェクト研究ニットを常に再構築してきたことが，センターの現在の特色を磨き上げてきたと評価できます。総花的な東北アジを求めず，センターの強みを生かしつつ，地域が取り組むべき課題に必要な人材を柔軟に確保し，内外研究者連携を進めて行かれることを期待したいと思います。

評価座談会記録

平成２８年３月２９日
（会場：東北大学東北アジア研究センター大会議室）

参加者
宇野伸浩教授（広島修道大学人間環境学部長）
堀江典夫教授（富山大学極東地域研究センター副センター長）
江渕直人教授（北海道大学低温科学研究所長）
岡洋樹教授（東北大学東北アジア研究センターセンター長）
高倉浩樹教授（東北大学東北アジア研究センター副センター長）
玉水敏明事務長（東北大学東北アジア研究センター・国際文化研究科）
高谷敏晶専門員（東北大学東北アジア研究センター）

岡洋樹　それでは、おそろいということですので始めさせていただきたいと思います。

本日は、年度末の大変お忙しい中、仙台までお越しいただきましてありがとうございました。ご迷惑だったかと思いますけれども、配付の資料までお送りいたしまして、ごらんいただいてありがとうございます。

これは私どものセンターでは規定上、３年に１回外部評価をしていただくことになっております。３名以上の先生から評価をいただくということになっております。前回の評価は 2012 年度にその前の３年間の評価をやっております。今回は 2015 年度でありますのでその前の３年間、つまり 2012 年から 2014 年の３年分について、外部評価の先生方から忌憚のないご意見をいただこうということでございます。

形としましては、既にお送りしてございます報告書の内容についてご意見をお書きいただくということ、それから、本日の座談会でいろいろなご指摘をいただいて、また、おしかりをいただきながら進めていって、この部分についてテープ起こしをして公開することを考えております。

では、委員長、宇野先生にお引き受けいただきましたので、先生のほうから進行していただければと思います。どういう問題をここで論じるかというのは評価委員の先生方にお決めいただくわけですが、この前、メールをお送りしましたけれども、大体報告書の様式の内容に沿って議論をしていただければと存じます。

では、２時間の予定でお願いいたします。

宇野委員長　では、不慣れですが、司会を務めさせていただきます。
最初に、それぞれ専門分野があると思いますので、自己紹介を行いたいと思います。私か

ら自己紹介いたします。私は、専門がモンゴル史で、とくに十三、四世紀、いわゆるモンゴル帝国時代の研究をしています。ですから、今回の外部評価の内容について特に専門としているわけではないのですが、歴史学を専門としていて、文化人類学も以前に国立民族学博物館で共同研究に入っていたものですから、ある程度は専門範囲であると思っています。岡センター長とは早稲田大学で学部時代から一緒で、大学院でも同じゼミにいたものですから、昔からの親友で忌憚なる意見が言えると思い、今日は参りました。今、広島修道大学の人間環境学部という文系の環境学部におりまして、研究より教育中心の学部ですが、環境系の学際的な教育も行っており、こちらの研究に興味を持って来させていただいたところです。今日は、いろんな分野からのご意見を聞き、刺激を受けて帰りたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

堀江　富山大学極東地域研究センターの副センター長をしております堀江と申します。専門はロシアの地域研究ですけれども、主に経済分野を中心に、労働を基軸として、労働市場とか企業の労務管理とか移民問題まで幅広くやっております。地域研究とのつながりという形でいろいろ今回の外部評価に貢献できればと考えております。所属する富山大学極東地域研究センターとも共通の課題があると思いますので，勉強させていただければと思います。よろしくお願いします。

江淵　北海道大学低温科学研究所の所長をしております江淵と申します。

多分､私だけが理系の人間だと思います。専門は海洋物理学という海の波とか流れとか、そういう話をやっていまして、実はそれも人工衛星から海をはかるということで、実は研究内容としてはこちらのセンターの工藤先生とか佐藤源之先生、いろんな学会でご一緒することが多いと。もともとはガリガリの自然科学の基礎研究なんですが、最近、我々の研究所もアムール川からオホーツクというつながりで人文社会系と連携をして研究をしなさいというご指導をいろいろなところでいただきます。自然科学だけでは閉じない環境問題というのが、どうしても人間活動が必要になるということで、そういうものにも少しずつ手を伸ばしつつあるということで、東北アジア研究センターは 20 年前から文理融合型の研究を進めているということですので、ぜひいろいろと教えていただければと思います。ちなみに私は、14 年ぐらい前まで青葉山の理学部におりまして、このセンターができ始めたころは、ああ何かできたなというのを山の上から感じていたところであります。中身については全く存じ上げていなかったので、今回勉強させていただきます。よろしくお願いいたします。

岡　私は先ほど、宇野先生がおっしゃったように、東洋史を専攻しておりまして、モンゴルをテーマに論文を書いてきました。私がやっているのはもう少し新しい時代で十七、八

世紀あたりを中心にということであります。東北アジア研究センターには 1996 年の創設以来来ておりまして、文系・理系のさまざまな分野の先生方と意見を交換しながらいろいろ勉強してきたと思っております。モンゴルというのは自然環境の影響を非常に受けやすい分野でもあって、資料がなかなか少ないんですけれども、新しい時代になるとその資料も出てくるということで、学際的な、文理融合型の歴史研究というのも非常に関心があるところであります。

３年目になりますが、センター長を引き継ぎまして、疲労困憊の状態です。あと１年もつか自信がないんですけれども。３年前は総長におたくはもう要らないよねと言われまして、何をやっているかわからないよね、なんて言われてたじたじになった思いがあります。何とかなくならないまま３年目を迎えております。最近余り言わなくなったので、多少続くのかなと思っておりますけれども。外部評価の先生方には厳しいご意見をいただきながら我々も自己革新していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

高倉　東北アジア研究センターの副センター長を務めております高倉と申します。よろしくお願いいたします。

私は文化人類学が専門でして、主にロシアの調査をしております。ロシアといってもシベリアのほうのいわゆるアジアロシアのほうです。こちらに、東北アジア研究センターに赴任してもう 16 年たつんですけれども、最初は旧ソ連が崩壊する前後でしたので、民族問題のこととか、体制が転換する中で先住民のような人たちがどういう形で適応していくのかという社会経済的な問題に関心がありました。そういう研究を進めていたんですけれども、こちらに来て特に文理連携ということを意識するようになって、最近は気候変動の問題を少し取り入れながら理系の人たちと一緒に研究しているということが多くなりました。その関連で江淵先生のおられる低温研の白岩先生ともコンタクトがあったりして、以前、白岩先生にこちらでご講演していただいたときはすごく魅力的な講演で、大変感銘を受けたことを覚えています。

それから、最近、北大とすごくご縁がありまして、北大のほうで動いています北極域研究プロジェクトですか、極地プロジェクトですか、そこにも委託という形でかかわらせていただいて、自然科学の知見と人間社会の知見というようなことを絡み合わせて、どういうふうに社会に提供していくかということをやっております。

もう一方で私、映像の、映画とかそういうものをつくることに関心がありまして、人類学ですので現地に行って映像を撮ってくるということをやっておりまして、それを使って映画をつくったりとか、写真展をやって、それを現地に持っていって日本とロシアの異文化交流の実践をするようなことに最近かかわっています。単に大学で論文を書くだけではない魅力というか、逆に、やることによって方法論に関しては随分学問もフィードバックがあるなという手応えがあるんですけれども、そんなふうなことも進めています。

きょうは３人の先生方にセンターのご批判をいただいて、副センター長としてセンター長を支える形で頑張っていこうと思いますのでよろしくお願いします。

玉水　私は、国際文化研究科事務長という、隣に文系の研究科があるんですけれども、そちらとこの東北アジアの事務を一応、まとめているというとあれですけれども、事務長をしています。
私、大学に勤めて 40 年なんですが、文系の学部、文系の部局の事務を担当するというのは、今回が初めて、国際文化研究科に来て３年目、アジアと一緒になったのが去年の 10 月からですので、まだ文系に関しては３年間ぐらいしか学部研究所のことをよく知らなくて、最初が金属材料研究所でしたので、その後病院、金研、それから、外に出まして弘前大学とかは本部でしたし、山形大学は医学部でしたし、極地研にもいたことがあるんですけれども、高倉先生とか北大の先生、江淵先生とかともかかわりがあったのかなとはちょっと思っているんです。震災の年に戻ってきたんですけれども、産学連携科にいたものですから、技術移転というところが多くて、理系の先生方とか工学系の先生方とおつき合いすることが多かったんです。
国際文化研究科と東北アジア研究センター、若干毛色が違うというか、一応国際文化研究科も文理融合的なところがあるんですけれども、それよりも東北アジアのほうがもっと文理融合的なところが強いと思っておりますので、その辺のことを、間もなく終わりなんですけれども勉強させていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

岡　こちらは高谷専門員です。お二人については、事務的な情報についていろいろ尋ねられることもあるかと思いましてご出席いただきました。よろしくお願いします。

宇野委員長　では、外部評価委員会の進め方についてはセンターから提案がありましたので、それに沿って進めたいと思います。報告書を読ませていただくと、多分、これまでの外部評価でも文理融合が１つの大きな課題で、文理融合までいかなくても学際的な研究というのがおそらくこのセンターの特色だと思うので、そういう視点からご意見をいただき、今後の展望や課題について議論できればよいのではないかと考えています。よろしくお願いします。
最初に、まず、この報告書の「１．理念・目的について」を話題にすることになっていますので、ここから入りたいと思います。３冊いただきましたが、2014 年度から少し書き方を変えていて、工夫をされたということがわかるわけですけれども、その「理念と目的について」どのように思われたか、ご意見を遠慮なくいただければと思います。どうでしょうか。

堀江　確かに私も今回の報告書を読ませていただいて、12年度版と非常に大きく変わったと感じました。理念・目的を再定義していくというのは本当に時間がかかるし、非常に苦労の多い仕事だと拝察します。特に今回は、前回の13年度版に比べて非常に明確な形で理念を提示しようということで、その部分は非常に高く評価できると思います。世界最高水準の研究を東北アジア諸国との国際連携の下に創造し、それによって地域理解と課題の解決に貢献するという形で理念が明確にあらわれていて、その中で特に印象深かったのは、東北アジアを「環日本海」地域というのではなくて、ユーラシア大陸の東半の部分を新たに東北とアジアという形で地域概念を考えていこうというところです。1つの研究機関がそういうふうに地域概念を明確に提示して新たな地域研究の分野を広げていこうとするのは非常にチャレンジ精神豊かな書き方だと思います。やはりセンターなので、その意味通り、全国的な東北アジア地域研究の拠点として機能していくんだということを明確にされている点、非常に意識の高い理念提示になっているように感じました。理念は本来はここまで書いてあればもう十分だと思うんですけれども、それに対して、機能強化に向けた取り組み方針というのが明確に書かれていまして、国内の北東アジア諸国の研究機関、研究者と一層の連携をする，ワールドクラスの飛躍を行う，という形で、非常にチャレンジ精神にあふれた目標を設定しておられるというところが非常に印象的だなというふうに感じました。

特に、重点戦略展開施策の中で研究フロンティアの開拓というのを挙げておられますし、あと、国際的な頭脳循環のハブとして機能すると。これはまさに、センターというのはセンターのスタッフだけでできるものではなくて、広く大きく、国際的な連携のもとにやっていくのが肝心で、だからこそセンターというのが中心であり、よりどころとなるというふうに思うんです。その意味で、それを明確に目指しておられるというところが、非常に印象深いと感じました。

社会貢献的研究の推進、そのほか社会連携の領域の創造など、国際発信も含めて非常に多様なところでの目標設定をされているので、私も研究機関に勤めているものですから、非常にたくさんのことを提示されていて、逆に負担ではないのかなというふうに心配になるほど、非常に豊かな目標の設定をされているというふうに感じました。

課題は、これをどういうふうな形で今後評価していくかというところになってくるように思います。挙げておられることが非常に具体性を伴うようなものですので、例えば「ワールドクラスの研究に飛躍する」という部分だったならば、どのようにワールドクラスになったのかというような評価基準というのが必要になってきますし、「国際的な頭脳循環のハブ」なども同じように、どのように本当にハブになったのかというのを評価していくかというのは本当に難しいことでしょうけれども、今後、こういう提示をされたからにはやはり課題になってくるのではないかと感じました。非常にチャレンジにあふれた理念と目的だと思います。

後々またお話に出てくると思いますけれども、このセンターはたくさんのことをやられているので、余りにも私にとっては非常にたくさんのことをやられて、一人一人の教員が非常にたくさんのことをやられているなというふうに感じましたので、どうか無理のない設計をされるように、特に、研究機関ですので研究を見据えて無理のないように今後の評価設計を考えていただければ感じました。

宇野委員長　ありがとうございました。非常にチャレンジングな理念と目的だということですね。では、江淵先生、お願いします。

江淵　私も今のご意見にかなり重なるところがあるんですが、文理連携とか融合とか学際的研究というのは、今はもう至るところでお題目として、言うのは簡単なんですね。言われることもしょっちゅうあると。一種、何度かブームがこれまでにも来て、最近また、例によって文科省が文系が要らないと言って、地方大学あたりが慌てふためいて文系と理系を無理にくっつけて組織改革をやるという何度目からのブームが来ていると思うんですけれども。

ただ、実際に本当にうまくいった例というのは非常に少ないと思うんですね。その中で、この東北アジア研究センターというのは20年続けてこられて、実際にどういう形でアウトプットを出すかと。これが文理融合でなければできなかったこういう仕事であるという、グッドプラクティスというのか成功例というのか、そういうものをどんどん挙げていっていただけると、後に続く我々とかその他たくさんのこういうテーマを標榜しているところの、役に立つと言ったらあれなんですけれども、いい例として参考になるのではないかと。また、そういうものがなかなかうまく出せるかというところが非常に難しいところで、それこそ、文化も違えば言葉も違ういろいろな分野の人たちがいて、成果って何ですかというところから話を多分始めなければならない。理系の人間だったら論文書けばいいんだろうという話から、そうじゃない新しい価値がある結果としての、そんな簡単な、学術雑誌に共著の論文を書けばそれで終わりということではなくて、もっと新しいクリエイティブな成果というのをどんどん出していくということがもっと必要なのかもしれないし。そういうところを何ていうかきちんと出していけると、非常にいい成功例として評価されるのではないかというふうに私は考えます。

宇野委員長　今日の話題の中で一番核心に触れるところは、多分そこだと思うんですね。文理融合は、難しいので成功例も少ないのですが、うまくいけば非常に価値が高いわけです。それがうまく進んでいるのか、あるいは第一歩が築けているのかというあたりが、今日の話し合いの中心かもしれないと思います。その話はまた後で研究のところでもう一度触れたいと思いますが、とりあえず、その理念と目的のところでお話しいただきました。

私の意見としては、12 年度、13 年度に比べて、14 年度は非常にうまく明確に理念と目的や重点戦略が書かれていることがよくわかって、工夫されたと思いました。ただ、読んでいて気になることは、「地域理解」という言葉が最初に出てきて、それは最後まで出てくるのですが、「課題解決」という言葉は最初に出てきただけで、後では出てこないのですね。東北アジアという地域の持つ課題に、センターとして解決のために何ができたのか、あるいはできるのかという点については、やはり理念として掲げただけでなく、目的や戦略としても、やはり触れていく必要があるかと思います。

しかし、実際には東北アジア地域の課題に、外国人として何ができるかということがあるかとは思いますが、地域課題に研究面から貢献するということは言えるのかなと思います。実際に、単に地域理解のための研究だけではなく、東北アジア地域の課題解決に貢献する研究というのも入っていると思いますので、それをもう少し出していただいてもよいのではないかと思いました。

岡　確かにおっしゃるとおりで、課題解決というと実際に解決したのかととられてしまうので、ご承知のとおり東北アジアは政治的にもいろいろな問題を抱えているところで、そう容易に解決する問題じゃないというところがあると思うんですね。ただ、単なる地域理解だけでは不十分だということは、我々も、それは意識しております。研究の内容というのは、文系・理系それぞれかなり多様なものであって、理解を優先するような研究もあるでしょう、あるいは、実際に役に立つ研究もあるでしょう。その辺の多様性というものはなるべく拾い上げていきたいというのがあると思うんです。ですから、理解したからもうやっちゃいけないよという話ではなくて、社会的に大きく貢献できるような研究も交えながらいろいろなプロジェクトを展開していこうというのが基本的なスタンスなんですね。

例えばモンゴル語の検索システムの研究なんていうのは、基本的には言葉の理解を目指したものであるけれども、システムができるとこれは使ってもらえるわけで、その貢献というのは明確ですね。そういった意味で、地域理解ということと課題解決あるいは貢献というのは、重なる部分もあるし重ならない部分もあるかと思っています。

ここ数年、僕がセンター長になってからですけれども、幾つかカテゴライズをして研究の分離を図ったところがあるんです。その一つに社会貢献的研究ということを入れています。社会貢献というのは、普通、アウトリーチを皆考える。講演会で講演をしてみたり、地域還元したりということを考えるんですけれども、そうではなくてもう一歩進んで、その研究自体が貢献になるようなテーマを設定しようじゃないかということを、既にやっている、実現していこうじゃないかということを考えました。先ほどの佐藤先生のレーダーの研究もそうですし工藤先生もそうなんですけれども、明確な社会的な課題のまさに解決を意識した研究プランを立てて実行していらっしゃる。そういう研究が幾つかあります。これを社会貢献的な研究という、それ自体研究であると、単なるアウトリーチではないと、

研究であるというふうに位置づけようということを考えて、ここ数年はそれをなるべく強調するようにはしているんです。ですから、先ほど課題の解決というのは、社会貢献的な研究ということに反映させようとしたというところがあります。

ただ、文理融合もそうですし社会貢献型もそうなんですけれども、それを余り強調し過ぎるとちょっと地道な研究を排除しちゃうところがあって肩身が狭くなっちゃうところがあるので、それもできれば拾い上げたいというふうに思っています。そういったあれこれを考えながらやっているところはあるんですね。前回の外部評価でも、立本成文先生（当時、総合地球環境学研究所所長）に評価いただいたんですが、めちゃくちゃ怒られまして、具体的に基礎分野というのは何のためにあるんだというんですね。地域割になっているかと思うと方法割になっている、変だと怒られたんですけれども。確かに変だというのはご指摘のとおりなんですが、ただ、プロジェクトユニットという部門を立てたりしながら考えてきたのは、そういった基礎的な研究の部分と本当に役に立つような実際的な部分というのをできる限り拾い上げていきたいというのがあるわけです。先生方の関心の持ち方はそれぞれ皆さん違いますので、無理を言えないんですね。無理を言っちゃうとモチベーションがなくなってしまって研究の活力が落ちてしまうので、なるべく皆さんがやっていることを拾い上げながら、位置づけながらやっていこうというふうに思っています。

文理融合については、単に融合、ディシプリンベースに融合することはもちろんありませんで、これは要するに結果を持ち寄って融合するという話ですけれども、これは連携的なプロジェクトは幾つかあります。文理だけではなくて、文文にしても理理にしてもそうですけれども、そういうことは意識しています。そのためにユニットなんかの仕掛けも組織的にはつくっています。理系の知見も交えながらプロジェクトを展開しています。その辺は皆さん余り、こう言ったら何ですけれども、余り嫌悪感なくそういうことにアプローチする環境が多分あるんじゃないかと思います。

高倉　そうですね。文理融合にしても学際にしてもどういうふうに評価するかというのが難しい部分であって、例えば地域研究という分野そのものが既に融合的な、あるいは学際的な分野というふうに言ってしまえばそうなりますので。どういうふうに我々自身がそういうものを評価していくかというときに、例えば同じ東北大の中で、文学部の中で行われている中国とかロシアとかに関する研究者がいるわけですね。そういう人たちと、もちろん一緒に共同研究もしたりするわけですけれども、文学研究科あるいは理学研究科では出てこないようなテーマを積極的に支援していくということが１つのスタンスなんだろうなと思うんですね。そこで、一番理想的には華々しい学際的なものができればいいと思うんですが、研究者としては地道なディシプリンベースな研究というのはやっぱりみんな確保したいというのが事実だと思います。それを具体的に、例えばロシア史をやっている人は、堀江先生はよくご存じだと思いますけれども、ロシアでみんな固まってしまうわけです。

そこに例えば中国の現代史を絡める人を一緒に入れることで、これはどこから見るかという話の問題で、少し遠くから見ると何だ同じ歴史をやっているんじゃないかとなってしまうんですけれども、多分、より分野の専門性に近いところから見ると、ああ随分チャレンジングな意味があって、そこで実際論文ができ上がっていって、それがさらにもう少し大きい、あるいはいろいろなプロジェクト研究にしてもつながっていければ、研究者の地道な研究という話と理念のところで出てくる新しい研究をどうつくっていくかというところが、何とかそこで折り合いができるのかなというのが正直なところです。

ただ、確実に、東北大の中の、国際文化も含めてそうですけれども、文学部、理学部、工学部の中だけでやったら出てこないような研究があります。例えば佐藤先生の遺跡というか遺物のレーダーの探査をやっていますけれども、あの研究というのも、考古学の、特にそちらに成果が出ているんですけれども、奈良文化財研究所と一緒になって考古学の人たちと一緒にやりながら、それを、ちょっと震災絡みなので宮城県警と一緒になって遺物探査をやっています。そういうところを我々としては評価していく、これが、この理念を立てたことによって結果的にでき上がっていった仕掛けなんだというふうに説明したいなというふうなところですかね。

岡　専門性というのはその領域の中の深みがあって、そこから先は見えなくなっちゃうと思うんですね。見えるはずなんだけれども見えない。その先の論文もなかなか読もうとしない。そのままいくというのが普通です。やはり異分野の人が同じ課題で集まらなくてはいけない。相手の話を聞くというのが大事で、相手の研究をするわけじゃないんですね、成果を聞くという。それは本を読んでもできるんだけれども、集まって話をすることも大事なことなので。そういう分野横断的なプロジェクトの組み立てというのにはなるべく気を遣っていくようにはしてはいるんですけれどもね。堀江先生ともずっと共同研究をやってきて経済学がだんだんわかるようになってきましたけれども、問題関心の持ち方が全然違うので、その違いを知ることができるというのが一番大きいですね。

宇野委員長　では、すでに「研究活動」に入っていますので、そちらに移りたいと思います。研究、組織構成も含めて見させていただくと、基本的には、それぞれの研究というのは基礎研究部門で自分の研究や以前からの研究をされていて、学際的研究や文理融合による研究はプロジェクト研究部門でされています。基本的には、自分の基礎研究があって、そこでしっかりした研究成果がでていることは研究者にとっては大事なことであるし、そこでやってきたことで自分の方法論をきっちり持っていることが学際的研究の中でも大事なことだと思うんですね。とはいえ、基礎研究だけで終わってはいけないようなことがセンターの使命としてあるようなので、文理融合研究や学際的研究を、さらにそれをどう評価するかということも含めてお話をいただければと思います。

報告書を見ていただいて、具体的に、この研究がうまくいっているのではないか、この研究はこうやったらもう少し発展性があるのではないかとか、あるいは、全体的な文理融合研究や学際的研究の進め方についてでもよいですから、報告書に触れながらご意見をいただければと思います。

堀江　基礎研究のほう分野立てとは別に，プロジェクト研究ユニットというのを別につくって組織を構成するという見せ方というのは非常におもしろいなというふうに感じていました。というのも、例えば基礎研究のほうではロシア、中国、日本、朝鮮半島といった地域別の分野区分が見受けられます。この分け方は、内容というよりは，どの地域を専門にされているかという研究対象地域の区分だと思うんです。もちろん、先ほどお話が出ていたように、やっぱり中国は中国だけを見ていればいい、あるいはロシアはロシアを見ていればいいという問題ではなくなってきているのが，今日の東北アジアの諸問題だと思います。その意味で、地域研究というのはやっぱり学際性を要求するし、現実の問題として課題が地域横断性を要求してくるということがありますから、それに従ってユニットをつくるという形がやっぱり自然なんだろうなと思うんです。その意味では非常におもしろい試みだというふうに感じます。

ところで，先ほどから宇野先生のほうから文理融合ということでお話が出ていますけれども、文理融合というのは、この報告書の中でどれだけ使われているんでしょうか。文理連携という言葉は散見されますが。

岡　当初、我々、センターをつくったときは、当初は文理融合が大はやりで、融合と書けば文科省もわかってくれるという、微笑んでくれるというところがあったんですけれども、融合は多分、誤解を招きやすいんですね。ディシプリンがそのまま合体することは絶対ありませんので、普通はそれぞれ別々にやった研究を持ち寄って１つの成果として提示するということが多いと思うんですね。当初、例えば日本史の先生が考古学者と一緒に研究することがあったんですけれども、その場合も別に考古学者が日本史の研究をするわけではないので融合ではないと。一方で工学だと融合のアルゴリズムを開発するみたいな、そんな感じのイメージを持つらしくて誤解があるなと思ったんです。そういう意味ではセンター内でもいろいろ議論はあったんですけれども、私どもはむしろ、融合と言うよりは連携と言ったほうがいいんじゃないですかと。連携を、むしろ組み合わせを変えていくことによっていろいろな知見を提示する､そのほうが生産的かなと思いました。もう一つは、そのほうがディシプリンを大事にすることができるので、おまえやっているのだめだよなんて言うんじゃなくて、むしろそれを使わせてくださいというような形です。

堀江　おっしゃるとおり、そのように思います。文理融合という言葉をそろそろちゃんと

破棄して、地域研究が文理連携を要求するんだというところの立場に立って、やっぱりセンターの理念を明確にしていくということが必要だと思いますし、文理融合に引きずられるべきではないと思っています。例えば，文理融合のために理系の方ができるだけ経済のほうに寄り添って何とか融合しようとする。もしくは、文系の方が何とか理系のことを理解して寄り添おうとしてしまう。地域の課題を前にして，いろんな分野の研究者が寄り合ってそれぞれの研究分野の成果を見ながら何か新しいプロジェクトとして１つにまとめていくことができないのかと考えることが，地域研究のアプローチの仕方だと思うんです。先ほどのシベリアのほうのお話でも、必要とされる分野がまたそれぞれの課題によって違ってくると思うんです。私もロシア極東の地域経済を研究する場合、例えば林業をやる場合には森林の植生のところまでやっぱり知りたいという意味では、林学をやっている方とかに参加してほしいと思うんです。でも、例えば国境紛争の問題についてやろうとしたときに、やっぱり現代と歴史、政治学の人たちを組み合わせが重要になってくると思うんです。無理やり理系の方を入れるという発想はないですね。だから、文であろうが理であろうが，地域課題が要求する学際性というのがあると思いますので、このセンターが様々な地域研究課題に必要に応じて柔軟に対応できる人材を十分豊かに確保しているというのが重要だと感じます。

岡　組織構成の話だと思うんですけれども、全く同感であるわけです。最初に設置されたときによくやったのが、「全員参加型の共同研究」かなと。堀江先生もご記憶があると思うんですが、全員参加できないんですね。参加しても意味がないんですね。それは要するに学際的研究をやろうとするという野心がそういうふうな言い方をするわけですけれども、おっしゃったように必要な課題には必要な分野というのが絶対あるので、それをちゃんと見定めないとプランが立たないんですね。集まって幾ら研究会をやって話を聞いても、ああそうですか、おもしろいですねで終わっちゃう。文理融合という言い方には安易なところがあって、もうちょっと地道に研究プランとして提示していこうかなというところがありますね。それから、１つの組織にみんな集まってもやっぱりこれはだめなので、本当はそういう協力をするパートナーは外に探さないといけない。連携する相手を外にどんどん広げていかないと選択肢がいつまでたっても広がらないということになると思います。外は、国内もそうだけれども国外もあるわけで、世界中に散らばっている学者を連携しながら取っかえ引っかえやっていく、そういう場所としてここをつくっていくところが大事なのじゃないかなと思います。

宇野委員長　連携する相手を外に探すのはなかなか難しいことではないですか。やはりユニットを形成するときにはセンター内で集まって、センター内の共同研究という形をどうしても組織上はとってしまうのではないでしょうか。できればそういうところも自由に

やってほしいとは思います。地域研究をしている者としては、必ず組織内のメンバーと組まなければ研究ができないというのではなくて、地域研究の課題は、さまざまな形の課題が設定されていることが必要でしょうから、一人で２つぐらいのセンター外の研究者と国際的な連携のもとで研究をしていくことが、このセンターの研究成果につながることではないかと思います。

岡　これは実は二重底になっていて、ユニットで幾つかの共同研究という理想組織を動かして、ユニット自体は責任を持つ組織基盤になっていて、共同研究には外部の人がたくさん参加するという形でやっています。そこで外部資金を取って、研究機関から取って、論文の形でそれなりに成果を出していくという形をとっていますので、ユニットはそのための仕掛けと考えていただければなと思います。

江淵　１つ教えていただきたいんですが、ユニットのつくり方とかそのテーマの選び方のメカニズムというのはどういうふうにされていますか。

岡　基本的にボトムアップを使っています。それぞれの先生方に。まず、ユニットの目的は、１つは時限組織であるということですね。だらだらと同じ研究をライフワークとしてやるのではなくて、５年なら５年、期間を設定してやっていくというやり方。もう一つは外部資金です。５年の間に必ず外部資金を取ってくださいねと、それまでは資金で支援しますけれども、必ず取ってもらってそれで自立してくださいよと言っています。外部資金を取ると当然期間が設定されますので、それが終わった時点でユニットも終わりというのが原則です。原則どおりいかないところがあるんですが、そういう目的でやっています。

江淵　トップダウンとボトムアップをどれぐらいブレンドするのかというのは実は非常に難しいところだと思うんですけれども、完全にボトムアップに任せてしまうと、やりやすいことというかつき合いやすい人たちとだけ組みやすいテーマがどんどんふえていって、面倒くさい相手とは仕事したくない。言葉でも文化でも共通の人たちがいいなという話になっていくと、そもそもの理念というかこのセンターとしての特徴というのが逆に薄れていくと。逆に上から、無理やり張り合わせてやろうとするとそれはおもしろくないし、結局何も出ないしという、そこのところのぐあいというのは何かうまいものは。

岡　難しいところですよね。ユニットの中に、21 世紀における東北アジア地域像に関する研究ユニットってありますけれども、これ、私がつくったんです。当初の目的は何かというと、地域研究そのものというより、研究連携を組織する媒体として動かそうと。全員参加ではなくて主立った先生に名前を連ねていただいて、堀江先生なんかにも共同研究を

しながらやって組織を連携をつくっていく、それを目的としていました。なかなか成果というのを示しにくいユニットでもあったんですけれども、富山大学の極東地域研究センターと島根県立大学の北東アジア研究センターと部局間協定をつくりましたし、そういうふうな努力はしていて、今回、人間文化研究機構で北東アジア研究をやるんですけれども、それもこれが基盤になっているんですね。組織づくりのためのユニットみたいなつくり方をしています。ただ、それも皆さんに全員参加して必ず何かやれと言っちゃうと俺知らないという話になってしまうので、まず私が独走する形で動いていきながら、たくさんの人をなるべく巻き込むように意識してはいます。そこの課題はなかなか難しいですね。

堀江　研究ユニットを見ていると少し気になるところがありまして、研究ユニットそのもので連携を示すときに、評価書では研究機関名が書いてあるんですね。何かセンターの中にまた小さいセンターがあるみたいな形で。本来、もちろん所属機関が共同して研究することでありますからそれを研究機関と書くことはできるでしょうけれども、本来、何らかの課題に向けて研究をするというときは、どういう人材がそれに集まっているかというのがやっぱり一番大きな関心事だと思うんです。ところが、組織が書いてあると何かこう、組織間、部局間連携のような感じになってしまってピンと来ない。あるプロジェクトで国際的なつながり、特にどんな専門の人間が集まって、どんな有名な人間が集まっているんだというようなところのほうが、説明を見たときにはなるほどというふうに感じるんですけれども、どうも組織名で書かれると，どういうふうにこのユニットが機能しているのかというのが見えにくいなというのが正直な感想です。

岡　恐らくセンター内でもそういう指摘はされていて、おたくのユニット何？みたいのという疑念はずっとあったんだと思うんですね。それは私の責任なんですが。やっぱり気を遣ったんだと思うんです。あれをしろと言いたくないところがあって。組織間連携としては、逆にボトムアップを中心にやってきたものだから、ある意味では唯一のトップダウン型のユニットなものですから、組織間連携の方にいってしまったというところがあると。その辺はちょっと、実際の事情からそうなっちゃった部分もあるんですが、確かにそれは反省しないといけないと。

高倉　少し違う観点から紹介できるかなと思うんですけれども、基礎研究部門というのはそれぞれのディシプリンベースということがベースにあるんですけれども、それと同時に教育の単位でもあるんですね。ここも実は少し歪んでいるところがあって、一番わかりやすいのはやっぱり理科系の、例えば 10 ページに出てくる機構で見ますと、地域生態系研究分野とか地球科学系研究分野というのは本当に理学部とか生命科学にそれぞれそのまま協力講座をつくっていくという形。ですから逆に言うと、基礎研究部門というのはやっぱ

り研究者が個人、ディシプリンベースの研究をすると同時にそれで研究者を育てていくと、その単位であると。文系のほうは少し歪みがあって、いわゆる社会科学に関連する人類学とか環境政策というのはディシプリンベースで物を考えるんですね。歴史とか言語というのはむしろ言葉に結構依存する部分があって、実際にそこで教育するというのはちょっとやっぱりずれている部分というのがあると思います。

ただ、なぜこの話をしたかというと、いずれにしても基礎研究部門というのは教育のことも含めてディシプリンを教えていくのに対して、あえてその枠を壊す形でユニットをつくって、もちろん理想的にはさっき堀江先生がおっしゃったように、実際にはまさに課題が要求する学際性を実現するためには、例えば私が自分で必要だと思ったらほかの大学の先生と一緒にくっついてプロジェクトを立ち上げるというのが一番理想なんですけれども、多分、東北アジア研究センターの中でこのプロジェクト研究部門ができてもう５年……（「2006 年からですから」の声あり）もう 10 年近くかかっているんですね。それ以前というのは学際研究すらなかなか進まなかった事情というのがあって、そうすると、センターの内部の中で可能な、もちろん万全ではない、万能ではないんですけれども、人間が協力し合うことで何か新しい研究の種ができるんじゃないかと。

手前みそですけれども、私が最初にやったときは、土木工学の人だったんですけれども、土木の人をシベリアに連れていって、何ができるか正直よくわからないまま行ったんですけれども、そうしたら、レナ川というかなり大きな川がありますけれども、そこの川幅 30 キロが冬は全部凍ってしまって、そこが冬の物流の基幹になるんですね。ちょっと軍事的な問題もあってなかなかうまく共同研究できなかったところもあるんですけれども、多分、文系の、例えば歴史にしても経済にしてもあるいは人類学にしてもの観点で見ていたら、多分そういう課題は見つけなかったと思うんです。それは、まさに同じ組織の中にいる、これもやっぱりたまたま家も近かったのでよくバスで一緒に帰っていくときに何かやらないとかそういう話になって、ちょっと行きましょうかみたいなそういう感じなんですね。多分そういう、明確な目的があって学際的なプロジェクトを動かすというのも１つのやり方だと思うんですけれども、やっぱり場所を共有しているがゆえに何か出てくるかもしれない。結果的に失敗するかもしれないんですけれども、そういうのを少しフォローしていくような仕組みとしてユニットがあって。ただ、それだけではどうしても、まさに課題が要求する学際性というのが十分ではないので、そうすると、実際にセンターの内部で一緒にかかわった２つ以上の研究者が、じゃあ具体的に共同研究立ててもう少し別な人たちを呼んでくると。

このユニットに関しては、少し逃げ道なんですけれども、東北アジア研究センターには兼務教員という学内的には仕掛けを設けていて、その兼務教員になってもらえればユニットを一緒に構成できるというような体制なんですね。ですから、理想的にはセンターの中だけでできればいいんですけれども、それだとどうしても足りないので、そうすると、じゃ

あ理学部の何とか先生に来てもらって一緒にユニットを立ち上げるとか文学部の先生と一緒にやるというふうな形で少し広げようとして。ただ、じゃあそれが十分かというと十分じゃないなというのも最近感じていることで。例えば、なかなか経済学部とか工学部とうまくいっていないなと。うまくいっていないという言い方は語弊があって、うまく共同研究がなかなか成り立っていないなというのも現実なんですね。だって、やっぱりどうしても、地域研究の全体像という形からいくと、歴史とか文化とか文化遺産とかというのにちょっと偏っている傾向があると思うんですね。そこをどういうふうに広げていくのかというのは、多分、先ほど江淵先生がおっしゃられたようにトップダウンでどういうふうに枠をつくっていくのかということだと思うんですけれども。なかなか、私が今理解している感じだと、研究者というのはなかなか保守的なものでして、まず、ユニットという形で身近にいる人と学際をやることにまず躊躇があって、この数年でこのユニットをやる人がふえてきた、ちょっと前はやる人が決まっていたんですね。それがちょっと広がってきたので多少はましになったのではないのかなというのが個人的に考えているところです。

岡　１つ補足させていただくと、ユニットの効用というのは幾つかあると思うんです。先ほどの学際的な組織になることも１つなんですが、例えば佐藤先生の減災を目指した電波科学ですけれども、彼の専門というのは電磁波の動きを一生懸命研究しているわけです。どう使うかという。本来､工学部というのはそういうことをやるんだろうと思うんですね。しかし、このユニットは、電磁波の研究をもちろん彼はしているんだけれども、それを何に使うかということにむしろ重点があるんですね。減災という言い方をしていますけれども、津波被災地の住宅の建てかえ移転に際して遺跡調査が必要だ、埋蔵文化財の調査が必要なんだ、それを効率的に進めるためにはレーダーが使えるんじゃないのという話。あるいは、彼は地雷の除去をずっとやっていますけれども、これも本来であれば電波科学の研究自体は地雷の除去なんていう発想は出てこないんだと思うんですね。ただ、それを地雷の除去に使おうとしている、それをユニットでの活動で可能にしているというのが１つの効用だと思うんです。

それから、高倉先生の災害と地域文化遺産にかかわる応用人文学的研究ユニットもそうですけれども、本来はアジア各地でフィールドをやっている人類学者が集まってきて被災地の調査をするんですね。これもストレートには多分、文化人類学そのものの関心から来るものではなくて、東日本大震災という現実の出来事がそういうことを可能にして、その現実の出来事に対応する体制をこのユニットがつくり出しているというところがあると思うんですね。純粋な、普通の研究科や学部ではやらないような問題関心の持ち方を組織として実現できるというのがユニットの１つの効用なのではないかと思っています。

宇野委員長　研究組織のつくり方、研究ユニットのつくり方の話になっていますが、ユ

ニットづくりのルールみたいなものはあるんですか。１人だけでセンター外の人と一緒にユニットをつくることはできないとか。

岡　規定上はできることになっております。ただ、２人以上の別の専門の方が集まるというのが通常、望ましいと。

高倉　ただ、そこは実際には申請したらすぐ通るという話ではないので、執行会議という意思決定機関の中でスクリーニングをやるので。ちょっとこれはというのを押したりというのは実際にはあります。

岡　ただ、当時、ユニットをつくったときに、学際とは別の要請、国際というのがありますね。国際的な研究ネットワークをつくってほしいというのが一方であって、その場合、単独の分野であっても国際的な活動をしてくれるのであればユニットをつくってもらってもいいですよということは入っていたと思います。あと、大型資金ですね。

堀江　融合のことについては、控え目に謙遜しておっしゃいますけれども、文理融合のためにお互いに意見交換をする場を設けたり、研究推進委員会でそれぞれの研究成果の情報交換をやったり、私の評価としてはこういう融合のための努力というのは，もう十分に頑張っておられるのではないかと思うのです。文理連携だけではなくて、人文系の学際的な研究をやることだって大変なことですよね。非常に時間をかけてそういうことについて取り組まれているなというふうに感心しています。

江淵　アプローチは多分、正解だと思います。無理やり圧力をかけて張り合わせるというのは絶対無理なんですね。ですから、環境をうまく整えてあとは自然に、融合なのか連携なのかはちょっと言葉はあれですけれども、少しずつ絡んでいくのを地道に待つと。３年のプロジェクトでとにかく３年後には融合した結果を出さなきゃいけないとかいう外圧をかけてお金をかけても多分できない話だと思うので、それはよいと思います。

ただ、ちょっと私の印象としては、何かこの基礎研究部門とか全体の人員配置の中とユニットを見ると、理系の人はそんなにたくさん入っていないなというか。佐藤先生のグループは確かに非常におもしろい研究をなさっているというのはあれなんですけれども、何か理系の人間は穴蔵に、重箱の隅というか、タコつぼにこもって自分の成果だけ上げるイメージが強過ぎるのかなと。学際的というところに余り出ていかない、私もそうですけれども、そういうところが少し出てしまっているのかなという印象をどうしても持ってしまいますね。

岡　そうなんですね。１つには、理系の皆さんは文系の皆さんと違ってそれ自体がグループになっているんですね。研究室でグループになっていますので、１人でやっているわけじゃないんですね。共同研究という形でたくさんの著者がいて協力し合っていますので、ある意味ではユニットみたいな構造にもうなっちゃっているというところはあると思うんですね。必要に応じて異分野の人たちも入れていくので、実質的にはもうできているようなところがあるんですが。ユニットという組織が表立って出てこないのは、もうやっているじゃないかみたいなところがあるんだろうと思うんですね。

ただ、非常に理系の分野というのは、ちょっと多分、工学研究科とか理学研究科のような組織のものと違って、1つの分野の中で皆同じことをやっているわけじゃないんですね。その辺がちょっと文系的になっていて、自営業みたいなものになりつつあるんですね。それは成果を出すという意味でいいことなのか悪いことなのかちょっと判断は難しいところなんですけれども。ここへ来て、10年間ユニットをやってきて１つの傾向として、基礎研究部門がバーチャル化しつつあるというところがあると思うんです。実際の活動は、やっている人はもうユニットでやっていて、理系は基礎研究部門を常にやってそれがずっと維持されているという構造ではなくなってきているところがあります。ただ、皆さんここに所属しているというと何か精神的に安定するところがあるので続けているわけですけれども、実際、よく考えてみるともう基礎研究部門というのはなくなりつつあるみたいな状態に。ただ、プロジェクト部門というのは時限のものですので、当然これだけにしてしまうと５年に一遍自分の組織をつくり直さなければいけなくなってちょっと大変なので基礎部門を残していますけれども、将来的には全部プロジェクト化していくというのも１つの方法なのかなとは考えています。ただ、これは今後また議論が必要かなと。

高倉　あと、先ほど江淵先生がおっしゃられた環境を整えて熟成を待つということに関しては、具体的に申し上げるとユニットをつくることで幾つかのメリットがあるんですね。例えば、東北大だと教育研究支援者という名前でちょっとわかりにくいんですけれども、いわゆる職種で言うと非常勤研究員ですかね、非常勤講師ですか、大体週28時間ぐらい働く、だから４日半ぐらい働く、ポスドク研究員みたいなものですね、結構給料が出る。昔、機関研究員と言われていたものですけれども。そのポストが一応つく形になっていて、その人が少なくとも座る自分の机と椅子があるようなものを提供するという形になるんですね。ですから、ある意味では、私の感覚だと昔の助手さんがいるような感じというのがあって、その人が実際にユニットのいろんなロジスティクスとかをやって結構いろんな形で手伝ってくれて。それが呼び水になって、１つこの４月１日から地学系のユニットがまた立ち上がりますし、生態系のほうもちょっと考えているという状況です。10年やってきて、ずっとそういう人がいるユニットもあるわけですね。そうすると、私なんかもそうなんですけれども、僕から見たら何であいつのところにずっといるんだということになると思う

んですね。だから、これはまあ、センター長裁量経費なのでどのぐらい予算が残っているかにも左右されると思うんですけれども。

ユニットをつくることによって開かれたメリットがあるという体制はつくっていて、それにうまく乗っかってきてくれればいいなと。本当にご指摘のとおりで、私も佐藤源之先生以外はなかなかかかわっていないなというのが事実なので、それをうまくそっちまで広げてやっていく。1つのポイントというのは、そのときにどうしても純粋に、理学的なあるいは工学的な問題関心ではなかなか地域研究に絡みにくいというのが多分あると思うんですね。ですから、地学で、転出してしまった先生が最初に立ち上げたいというのもジオパークというものでしたし、生態学の先生の場合は生態系の保全ということをやると、やっぱりどうしても社会学とかそういった社会科学系の人たちとの連動が出てくるんですね。そこを彼らがどのぐらい協調して研究するようになるのかというところかなというのはちょっと思います。

岡　教育研究支援者については、かつての助教や助手とは違って、分野に配置してある、配属しているのではなくて、そこに常にあるのではなくて、センター長裁量でプロジェクトの期間中だけ配置しているんですね。

宇野　ユニットに配置していると。プロジェクト研究分野の。

岡　そうです。ですから、プロジェクトが終わると自然になくなるわけです。あるいは、プロジェクトに必要なければ配分しないんです。ですから、全部に配分しているわけでもないんです。そういったある意味では常に組み替えが可能な形の制度になっていますので、ユニットに非常になのかなと思っています。先ほど言ったように、センター長裁量という原則はずっと貫いています。そういう意味ではトップダウンなんですかね。

堀江　人文社会科学系のほうのユニットはやっぱり歴史に偏りがちな印象を受けます。その偏りは問題かなと最初思ったんですけれども、考えてみれば、東北大学のこのセンターは歴史に強いという部分も1つの特徴でもありますね。センターの理念のほうでも、北東アジアが直面している課題として歴史認識、北朝鮮拉致問題、国境問題など、これらも歴史が非常にかかわる問題ですけれどもやはり現代的な問題でもあるので、社会科学ならば政治学とか国際関係論とか、そういう分野の方がいたら本当に豊かになるんだろうなと思います。ただし、そういう研究者がひとりいたからといって，そういうことができるわけではないので、歴史に強いのがこのセンターだという特色を活かすことも必要かなというふうに感じます。その辺はどういうふうに考えておられますか。

岡　ユニットをごらんいただきますと、高倉先生のところは文化人類学ですし、磯部先生の出版元資料は文学ですね。あと、言語学もありますし、必ずしも歴史に偏っているわけではないと思うんです。歴史をやっている人が目立って見えちゃうのかもしれませんが、それほど歴史に偏っているわけではないんです。要するに、ここで歴史のユニットは１つだけ、私がやっている１つだけですので、それも経済学部の皆さんと一緒にやっているので、必ずしも偏っているとは思っておりません。ただ、過去に偏る研究が多いかもしれないですね、歴史というよりは。過去の遺物であるとか、そういうところはありますね。社会科学的な分野の研究者というのは、我々も喉から手が出るほど欲しいんですけれども、ただ、なかなか人事の問題で思うようには進まないです。

堀江　そういう場合は客員とかとさまざまな連携が考えられると思うんですけれども、たくさんの海外からの客員教授がおられるようですけれども、これは何か特別な予算があって受け入れたりしているのでしょうか。また，例えば公募とかをして受け入れているのでしょうか。

岡　外国人研究員といいますか、外国人研究員、客員教授、助教授ですけれども、これについては我々２つポストをもっています。そのお金がずっと配分されてきていますのでそれを使っています。今、ポストという考え方はないですけれども、そのお金で２人分を既に確保していて、できれば理系と文系１人ずつ呼ぶような形になります。どういう方を呼ぶかについては、公募はしていません。現在はユニットでの研究の必要性からとか、あるいはそれぞれの知り合い、あるいは組織的な連携の必要性から、その都度人を選んで呼んでいる形です。

高倉　堀江先生がおっしゃられた国外の客員、学内の兼務教員あるいは客員教員とかを含めて、政治学とか経済学分野との連携がちょっと弱いというのは事実だと思うんです。そこはなかなかやっぱり、お互いに共同研究をやろうといっても、こちら側に例えば政治学とか工学なんかがある程度許容できて一緒にプロジェクトを立ち上げられるような人がいないとなかなか来てくれないというのも事実でして、ご指摘のとおりの部分もあるなと思います。

岡　ご承知のとおり、今もうほとんど運営費、交付金が削減されていて、人件費が減らされつつありますので､これから人を各組織でふやすということは不可能だと思うんですね。じゃあどうしたらいいかと考えると、やっぱり組織間連携しかないんだろうと思うんですね。各組織がいろんなテーマで社会科学なり人文科学なりいろいろなことをやっている、それが連携することによってそういった点はある程度補えるのかなというふうに思ってい

ます。機構側のプロジェクトはそういうふうな観点から組み立てようと思うんですけれども、それが実際の有機的な連携につながるかどうかというのは今後の展開次第ですけれども。

宇野委員長　それでは、少し具体的に、それぞれの共同研究や学際的研究、文系・理系またがる研究で、こういう研究は特に評価したいとか、もっとこういう点を伸ばしていただけたらとか、そのような具体的なことも触れていただければどうかと思うのですが、いかがでしょうか。

　ではひとつ私から。この報告書の中で、文系・理系にまたがるということでは、宮本毅さんという方が火山の噴火の歴史をされていて、ここには火山研究の方は何人もいらっしゃるけれども、その中で宮本さんは、歴史研究、つまり白頭山の 10 世紀の噴火の問題、それから十和田湖の噴火の問題という歴史的なことに災害史として踏み込んでいます。これはうまく理系・文系の両方にまたがった研究をされていると思うのです。この研究は、実際に、歴史学の方と火山学の方の両方がかかわっているのでしょうか。

岡　これは、前にここにいらっしゃった谷口先生という方が当時ユニットをつくっていらっしゃったんですね。具体的には白頭山の噴火の歴史的な研究をされていたわけです。10 世紀大噴火というのがあったということと、白頭山の噴火の今の状況を把握しようということを中国、北朝鮮との共同研究をやっていたんです。そのときに、過去の噴火の事象を調べるときに歴史資料を使おうとしたんです。特に、朝鮮実録ですが、朝鮮の資料から噴火にかかわると思われる記事をたくさん集めたんですね。これは外部の文献の歴史家にお願いしてやってもらっているんですが、それと地層の様子とかを比べてみたんです。比較しながら、10 世紀に大きな噴火があったろうと。それが灰が日本列島で観測できるんですね。大体、東に灰が流れて。それが歴史の政治的な事件にも関係しているかもしれないというような発表となったプロジェクトです。

宇野委員長　理系の分野の先生は、火山学と生態学や生物学、その２分野に人数が多いですね。こういう災害史のようなものは、理系・文系にまたがる学際的な研究の１つではないかと思ったのですが。

高倉　私も災害史というか、環境史みたいなものに関心を持って一時やろうとしたことがあって、谷口先生がおっしゃっていましたけれども、実録みたいな過去の資料から記事を集めても地質学では使えないと。情報として、それだけでは使えないと言うんですね。だから、いろんな何かおとぎ話みたいな話がそこに書いてあって、それが灰が降ってきたような話のようにも読めるし。だけれども、資料としては使いにくいということを１つの教

訓というか、知見ではあったんですね。噴火が起こったかもしれないこと自体は火山史のほうで何とか抽出できるんだけれども、それが社会にどう影響を与えたかという話になってくるとなかなか資料だけでは、特に地域資料って少ないので、10 世紀ですからなかなか難しいということをおっしゃっていました。もうちょっと別な組み立てが必要なのかもしれないですね。

宇野委員長　これはもうこれ以上は発展しにくいのですか。

高倉　そうですね。

岡　これも１つ、若い人をそれで養成しても、評価ですね。その問題があるんですね。火山学のメーンストリームが全然、外れてしまっているので、評価が難しいという部分があるということをおっしゃっていましたけれども。融合研究は皆、そうなんですけれども。

宇野委員長　学際的な研究は、私も人類学と歴史学にまたがる研究にかかわってきましたが、これは普通の２倍の能力とエネルギーを必要とするわけですね。２つの分野の研究を把握しなければならないですし。だから、よほどメリットがないとなかなか研究者は学際的研究にいかないですよね。しかし、やってみて初めて、非常に学術的に意味があることに到達できることが分かれば、それはやった価値があったと思うことができます。それからもう一つは、社会的な貢献があれば、それは研究する価値があると思います。単純には２倍の能力とエネルギーが要るわけですが、それをどこまで本気でやるかというのは、やはり得る成果がどれだけあるかにかかっていると思います。１つは学術的な成果、もう一つは社会的な貢献、そのどちらか１つでも、本気になって研究する原動力になると思います。

こちらでは、震災後の災害研究は、社会貢献でもあるしすぐれた研究でもあると思いますが、このセンター内で随分いろいろな方がされていて、このセンターの１つの特色になりつつあるように思いました。さき程話に出た地中の遺跡をレーダーで探査する研究や、高倉先生がされている震災後の無形民俗文化財に関する研究や、江戸時代の温泉と震災復興との関係についての研究など、どれもこのセンターならではの研究だと思いました。今後の展開はいかがですか。

高倉　私自身の個人的なことを申し上げると、やっぱり震災の後にこれまで行ってきた地域研究とはかなり違うアプローチを実際に調査するようになって、それは学術研究としてもかなり、言い方はあれですけれども、おもしろいなと思う部分がありましたし、やはり社会的な反響という意味では非常に、シベリアの極地の調査をやっているより国内の調査

をやったほうが読み手が大量にいるということを改めて感じまして。いろんなマスコミにしても、テレビとかラジオにしてもいっぱい出ることができたので。そういう意味ではとっても手応えがあったなと思います。

ただ、災害の研究というのはある意味では地域研究と全然違うコンテクストに向かっていく部分というのがあって、例えば今、無形民俗文化財と地域復興みたいなことで調査をやっていて、そうすると、次に国際的にやるとどことやるかというとニュージーランドとかインドネシアの人たちと一緒にやるようになっているんですね。やっぱりそれは、2004年のインドネシアのスマトラの津波がありましたし、ニュージーランドは2011年にかなり大きい地震がありましたし。そうすると、そういう中で人文系の特に調査をやるような研究者がどういうふうな、政策に対して対応できるのかとか、学問的なビルドアップはどうだったのかというような研究。多分これはもう一つの、震災から見て言えば、歴史のいわゆる文書のレスキューみたいなものがあるんですけれども、多分、方法論的には文書をレスキューするというのは全世界どこでも可能なんですけれども、論理的にはですね。じゃあ、中国とか朝鮮半島とかロシアで文書の分散の仕方そのものはもう全然違っているので、多分あの方法というのはそう簡単にはほかのところに普遍的に持っていくことはできないと思うんですね。そうすると、やはり特に社会的な貢献というか効用というのはすごく明確にありますから、どうしても日本国内に収斂されていく部分があると思うんです。一方で、佐藤源之先生の地雷に至っては、まさにあの技術は全世界どこでも使える話になっていて、そうすると、東北アジア地域研究というのと少し異なるコンテクストにいくなというのが、いいか悪いかは別なんですけれども感じています。そういうジレンマというか、東北アジア地域研究と関係ないところに自分の研究が進んでいくなという印象はあります。

岡　それは個々のディシプリンは地域に関係ないわけですから。地域で縛るほうがむしろ無理なところがあるんですね。それはそれとして、この高倉先生のユニットと佐藤のもそうですが、学際・融合的な研究になっているんですが、先ほどの白頭山の研究とは違って重心がどちらかにあるんです。白頭山のやつは、２つの歴史と火山学をイコールフッティングで結びつけようとしているんです。これはうまくいかないんですね。相互に、関心が全然違うので。佐藤先生はあくまでも電磁波の研究をされている。電磁波の研究を何に使うかということをやっていらっしゃっていて、彼は別に遺跡の文化的な内容に関心があるわけではないんです。それがどう見えるかのほうにむしろ関心があるわけですけれども。高倉さんのもそうで、文化人類学や社会人類学が持っている方法にうまくマッチしている。対象も、シベリアじゃなくて日本ではあるけれども、同じやり方でできるわけですね。それを幾つかのフィールドを異にする人たちが一緒に集まってやっているという。しかも、日本にまで来て調査をしているというのも、それも無形民俗文化財という何か核になる関

心のあり方がしっかりしているんですね。

融合研究するときには恐らく、連携にしても大事なことは、そこで、どちらかのベースがあって、そのときに何か使える情報をどこかから持ってくるというスタンスをとらないとだめなんだろうと思うんですね。だから、単にいる人を集めて何かしようという話ではなくて、そこのモチベーションがしっかりしていれば、連携だけじゃなくて融合までいくかもしれないというところはあるかもしれないなと思っています。

江淵　理系の立場から言うと、古いデータをいかに今の科学的な、いろんな観測機ではかるデータと昔の古文書に書いてあった地震が起きて何人死んでうちが何軒倒れたというのとどう整合していくかみたいな仕事というのは、昔からあるんですね。その場合、理系の立場から言えば、古文書を読める人を探してこいと。そこから出てきた家何軒とか、大体大げさに書いてあるんですね。当時の家の構造からして、これくらい人が死ぬということは今の震度にしたらどれぐらいで、それだってそんなに確かではないけれども、それでいろんな時系列をつくっていくとか、気温がどれくらい今より高かった低かったみたいな話をいろんな科学的データとどう整合させていくかというような仕事は、十分成り立つとは思うんですけれども。そうすると、実際にそれで動員された文系の人は、ただ読んで翻訳した、本当に通訳みたいな仕事になってしまうとそっちは余り評価されないというか。そういうところのいろんなあれはあると思うんですよ。

そこのところをうまく両方が評価されるような、どっちが主導でもいいんですけれども、そういう組み立てをうまくやっていかないと、ただ働きと言っちゃいけないんですけれども、労力が多い割には余り実にならないと。結局、さっきもおっしゃっていましたように、学際的な研究って余り一般的には評価されない、重箱の隅っこのほうがその分野では評価されるし論文だってどんどん出るし。だけれども、社会的ニーズというか、センターのミッションからしてもやっぱりやらなければいけない仕事というのが必ずあって、多少、短期的には遠回りであってもやっぱりやらなきゃいけないところというのはあるんだろうなと。

岡　欲しい情報ってやっぱりあって、私は18世紀あたりでモンゴルのいろんな災害情報があるんですね。文書が残っていますので。雪害が起こった、生活が大変だから何とかしてくれとみたいな文書がたくさんあるんですね。ただ、その情報が本当なのかどうかという疑いがあって、要するに誇張しているのではないかと。負担を逃れるためにですね。そこを確かめようと思ったんです。

当時の雪害が起こったような気象を示してくれるような理系のデータはないかと思って、年輪気候学の復元みたいなデータを拝見して使おうと思ったんです。ただ、それなりに対応するんですが、年輪気候学って理学系の学問が見ているのは災害じゃないんです。

それは乾燥であったり降雨量であったりするわけで、災害じゃないんですね。文系のほうは、災害なんです。災害は社会側の問題で、自然状態は同じであっても吸収されてしまえばもう災害にはならないわけですよね。そこに開きがあるんですね。開きをどう埋めるのかが難しいんです。対応関係としてはある程度のことは言えても、実際にそれを同じデータとして歴史学の資料として使おうとなるとかなり無理が生じてしまって、批判されちゃいますよね。無理でしょうみたいなことになっちゃうので。その辺いろいろな工夫が必要だと。あるいはデータの選び方なんでしょうけれども、もちろん理系も精度が高まってくればうまい使い方ができるんでしょうけれども、それはこれからの課題です。私たちも、使う側のモチベーションというか、必要性というか、しっかりしていて、それに即した何かをよそから持ってくるというのが融合研究として非常に重要なのかなと。

高倉　多分、２つぐらいアプローチがあるなと思うんですけれども、やっぱり１つは、１人文理融合だと思うんですね。これは究極で。やっぱり労力はかかりますけれども、でも、結構いろんなことがわかりますし、私、実はシベリアの気候変動の研究プロジェクトのなかで、水文学の論文をかなり読みまして。それはその専門家と相談しながら読んでいったんですけれども、数学的なセンスはないので読めるのは問題関心のイントロと結論だけなんです。あと、考察のところだけです。方法とか読めないわけです。彼らとしゃべっていて、でも、そういうものを読むことによって、レナ川の洪水の状況が、例えばここ 10 年ぐらいでどんなふうなトレンドがあって何が問題なのか、何が問題として議論されているかということはわかるんです。それに基づいて人間社会を見ている人間が、どういうふうな課題を設定できるのかというところだと思うんですね。ただ、議論を立てるにしても、自然科学の知見の中で議論されてきたことの妥当性ということは私は検証できないので、そもそも考察できない。しかしこういう研究蓄積があってそれに基づいて問題を立てますよと。その部分に関しては批判可能なわけですよね。それに基づいて自分のデータをとってきてこういう考察ができてこういう分析ができますとなると、そこは人類学の論文で、同じ専門家の人はそこがいいのか悪いのかという議論ができるわけです。こういうのが１つのあり方かなというふうに思っています。

もう一つは、たまたまそれはいろんな条件があってそういうことが成功したのかしなかったのか最終的にはまだわからないんですけれども、そんなふうなことができたと思うんですけれども、やっぱり学際的なあるいは文理連携的な研究をやるときのリーダーが、どういうふうなふるまいをするかというのが結構重要かなと思うんですね。やっぱり研究者が持っている研究の知的な関心をおもしろがるというか、それがいかにおもしろいのかということを周りと共有することで、さっき江淵先生がおっしゃられたように、ただ働きになるんじゃないかなとかというところもあると思うんです。でも、やっぱり共同研究のおもしろさというのは、ほかの分野の人たちが持っている知的な好奇心あるいはおもしろ

さというのに自分が触れて、そこで何かインボルブしていく部分というのがすごくあると思うんですね。じゃあ、結果的にそれをやっていくのかというのが一番問題で、やっぱりそこは、こういう言い方はあれなんですけれども、リーダーがいて、若手の、例えばさっきの火山の話でしたら、若手の人が予算をもらってやっていくというのが現実的なあり方かなと。

実際の学際的な、例えば欧米なんかで行われている文理連携的な研究というのは、要するにＰｈ．Ｄがそれで雇われて、それに実際かかわっていくわけです。そこは何かどうしても、一方で確かにジレンマがあって、そのことをやることによって若い学者の研究業績に何が蓄積されるのかというのは、その業界によっては評価されないかもしれないわけです。でも、そこは何かしようがないんじゃないかなというのが正直なところあって、それを正当化できるのが研究のおもしろさと、学術的な価値と、社会的な反響というか貢献というところで、そういうのがそろっている研究であれば可能になってくるんじゃないのかなというふうには思っています。

宇野委員長　高倉先生の研究はすごくおもしろいと思っていて、狙い目がはっきりしているのが非常によいと思います。２つの分野にまたがった場合に、狙い目がはっきりしないと労力が無駄になってしまうことが多いですよね。狙い目が当たっていないとまたそれは困るのですが、狙い目が当たったときにすごくよい成果が出て、両方の分野から評価されるというのがもっとも理想的です。狙い目が見えているということが非常に大事だと思いますが、高倉先生の研究は狙い目がはっきりして、とてもうまくいっているという印象を受けました。そういう意味では、リスクを負いながら、狙い目が当たったときに成果が大きいし、狙い目が余りよくないときには、労力はかけたけれども成果は出ないということになります。あるいは、片方の分野にとってはプラスですが、片方の分野にとっては単に労力を提供しただけということになります。

岡　ただ､そういう労力を提供したことが評価されるような仕組みがあればいいですよね。

宇野委員長　そうですよね。

岡　理系だと共著論文というのがあるかもしれないんですけれども、文系でもそういったことで、文系の先生が理系の研究者の研究に貢献できたということを評価できるような何か仕組み。学会だと難しいかもしれないけれども、組織だったらある程度可能だと思うんですね。参画しているというのは。

宇野委員長　それは論文では、かかわった研究者の名前が全員出るわけですよね。

岡　ええ。ただ、それこそ理系の、どこか例えば地震学会誌に論文が載ってそこに文系の先生の名前が載ったところでその文系の先生の成果になるかというと、そちらの業界では何それと言われるだけで。その逆もあるかと思うんですけれども。

高倉　そもそも文系では共著論文なんてほとんどないので。

岡　そうなんですよね。そこが問題なんです。

宇野委員長　理想的には、歴史上の地震についての研究が、歴史研究に反映されて、歴史研究の中できちんと評価されるということがあってほしいと思います。だんだんそうなりつつあって、気候変動を踏まえた環境史や災害史が世界史の中で必要とされているので、将来的にはきちんと評価されることはあると思います。ただ、今は環境史や災害史に関心を持っている人は歴史学者の一部なので、評価する人としない人に分かれるかもしれないですね。

高倉　多分、歴史に関しては、地域研究、少なくとも日本の地域研究。アフリカ研究とか東南アジア研究というのは比較的文系と理系が一緒にやっていて、雑誌を見ていても両方がいて、両方が載っている、そういうパターンがあるんですね。それがどういうふうに専門分野で評価されるかはまた別ですけれども、少なくともこういった学際的な論文というのを評価する仕組みがあるのとないのとではかなり違っていて、残念ながら東北アジア研究にしても、北東アジア研究にしてもそこはちょっと弱いなという印象を持っています。

岡　最近、教員を評価しろと盛んに言われるものですからやろうとしているわけです。今のような研究をどう評価するのか、まだ論文にならない、問題提起にとどまっているのが何年か続く。続いた場合、その期間はその人の評価って一体どうなるんだと。これは評価できないので、そうすると業績ないねという話になってしまって、そこでもうやめちゃいますよね。ある程度、２年なり３年なりそういう試行錯誤が続くことが可能な何か仕組みが必要なのかなと思うんですね。

江淵　若い人たちの評価というか。偉い先生はいいんですけれども、だけれども、若い人たちがプロモーションをしていくときに、特に理系の場合は論文何編で、引用回数が何回と、そういう話ばっかりなので、今。もちろんそれだけではないとは言い続けてはいるんですけれども、どうしてもそうなると学際的な広い視野で何とかというよりは、重箱の隅を突っついて数だけ稼いでいるほうが数字的には上がっていくと。それが本当にいいのかという話と、かといって背に腹はかえられないというところというのが今非常に問題なと

ころだと思うんですが。

高倉　それはやっぱり、このシベリアプロジェクトというのは京都にある地球研と一緒にやったんですけれども、やっぱり大きな問題になっていて、もう既に職を得ている教授の先生とか准教授の先生はじゃあ一緒の論文誌を出そうというのに結構みんな乗り気で来るんですね。やっぱり一番乗り気じゃないのは若手の人たちで、まさに先生がおっしゃったように、書いて何ぼになるんだみたいな世界があって。そこはやっぱり、これだけ学際とか文理連携ということが重要だと言われるとなると、多分専門家も業界の中ではそういうものを評価する仕組みができない以上､また別な評価の仕組みをつくっていくしかなくて、私たちのセンターにしても、地域研究あるいは、それこそ低温研にしても、そういうふうなことをやっている人たち、特に若い人たちですけれども、というのを評価していく仕組みというのをつくっていかないと、結果的には 10 年たったら全部消えていたみたいな、そういう形になってしまうと思うんですよね。

岡　学会は基本的にディシプリンベースですので、そこへ持っていって学際研究というのは自己矛盾しているわけですよね。学際性自体を評価できるような雑誌や学会を別につくらなければならないなというふうに思いますね

宇野委員長　これは文理の学際研究にかかわらず、文系の中でも歴史学と人類学、歴史学と経済学にまたがって研究した場合に、どのように評価されるかということも関係しますよね。堀江先生いかがですか、評価については。

堀江　来年度から､北東アジア地域研究が人間文化研究機構の新しい事業として始まって、こちらのセンターもそのプロジェクトの研究拠点に選定されています。北東アジアは，１つに地域概念としてまだ明確じゃないために，地域をどう捉えたらいいのかというところがまだまだ不確実で、その意味では、北東アジア地域研究っていうのはどうあるべきなんだという部分の提示はやっていかざるを得ないのかなというふうに思います。そういう意味では、「21 世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット」というのは継続的にやっていかれるべきなのではないかなと思いますし、非常にセンターの根幹的な部分かなと思います。大学の研究機関としてもそういうふうに積極的に、北東アジア、東北アジアとは何だということについて問い続けることは，やっていくべきではないかなと思います。

個別の研究についてなんですけれども、このセンターができ上がってからやっぱり随分と世の中が変わってきているところがあって、１つは中国の存在が非常に変化してきた。そういう意味では、中国の台頭にまつわるさまざまな北東アジアの課題というのが含まれ

ている。それは経済的な台頭だけではなくて例えば環境問題なんかも中国を震源地としたものを地域が共有しているわけです。バルト海の環境問題というのは、ソ連崩壊のときにはヨーロッパも非常に意識してバルト海沿岸諸国も非常に意識して問題を共有した経過がありましたけれども、残念ながら日本海、北東アジアというのはそういうような機運というのがなかなか盛り上がらなかったように思います。みんなで協力して解決しなければならないという意識が高まることが余りなかったと言えるかもしれません。ＰＭ2.5の問題にしても、これは地域共通の課題として上がってきているので、明日香先生がやっておられる研究というのは非常に注目すべき研究でしょうし、あと、極地について高倉先生がやっておられる研究は非常に重要ですし、環境問題や物流、経済の動向、それから国際関係も含めて非常に重要になってくると思いますので、それに先鞭をつけられているという意味では非常に高く評価できる研究だと感じています。

宇野委員長　学際的な研究をどのように評価するかについては、どうでしょうか。

堀江　これは本当に難しいですね。基本的には文理融合に関しての個々の研究者の努力を評価してあげることは重要なんですけれども、若手研究者に対して学際性を求めるというのは非常にきつい要求だと思うんです。だから、それを全体として学際的であるようにするマネジメントそのものが求められているのであって、若手研究者個々に学際的であることを求める必要はないと僕自身は思っています。

岡　恐らくそれは研究ですよね。論文の形になるような研究という意味では難しいかもしれないですが、知識としては他分野を知っておく必要があると思うんですね。

堀江　そうですね。彼らが将来かかわっていく文理連携型のプロジェクトに関心を持って，今後とも例えば地域研究にかかわっていくという意味では、自分の研究課題にしか関心を持たないというような研究者である場合、途中からどうぞ関心を持ってくださいというのは非常に難しい。だから、こういう文理連携型の研究機関の１つの使命だと思うんですけれども、地域課題課題に対しては、それぞれの分野において協力していかなければいけないということが最も重要で、そうした専門を越えた協働を教育も含めてやっていく必要があるかもしれません。

これは非常に相乗効果があると思うんですね。植生をやっておられる方でもやっぱり周りにどういうような地域の文化があって、歴史があって、経済があって、政治状況にあるのかということを理解しないと地域研究はできないですし、そういう意味でどんどんどんどん出てくると。ただ、これは高倉先生、僕はいつも思うんですけれども、地域研究って特に一国研究の地域研究をやっていくのは、一国丸ごと理解というのを目指す傾向がある

と。これは日本独特の傾向みたいですけれども、日本の地域研究者は一国について経済分野だけではなくて文化含めて全部理解してその地域を描けというのが１つのポイントで、どうしても１人で学際的というのをどうしてもやってしまうんですけれども、できれば、若手の人に、特に理系の人にはそれを追い求めるように要求したいと個人的には思います。

岡　最近、教養というのを非常に強く言われますよね。専門ばかじゃなくて教養をちゃんと身につけさせようとか。なかなか難しい話ではあるんですよね。

堀江　地域課題の議論に多様な専門の方が参加するのは，おもしろいことですので、それはやるべきなんでしょうけれども、ひとつの論文に全員参加でその成果を凝縮させないとダメかというと，それは少し違うと思います。専門分野がしっかりあってこその学際性であるので、それぞれの分野についてしっかりした論文を書いてこそ，やっぱり若手研究者の教育だと思うので。そこの部分を大切にしたほうがいいんじゃないかなと思います。

岡　地球系の研究者の中で災害史をやると歴史学としても中途半端だし、多分学際的にも歴史学的に中途半端な論文を書くとそれはやっぱり評価しにくいところがある。やはり歴史学的方法について一人前である、誰でも認めるレベルでなければいけないし、その上で他の分野を取り込みながらというのは、環境史だったら求められるものだと思うんですね。最初から学際的なちょっと新しいところを入れて歴史学が存在するかというとそれは好ましくない。ある分野について誰でもが認める研究者である必要があるし、その上で学際的なことができればいいと思います。できるほどいいというのではない、できればいいと。まずはある分野で一人前だということは絶対必要だと思うんですね。なかなか。とはいえ、思うのは、２つの分野を学生のときからきちっと学んだ人がいたら、先ほど出た１人学際、そういうケースが出てくる可能性もあると。歴史学の中だと、昔は西洋史と東洋史と分かれていたんですけれども、最近は西洋史と東洋史、両方またがって学生時代から勉強して、両方にまたがる研究をする人が出てきているので、それはやはりその人にとっては強みなんですけれども。それは歴史学という１つの共通の、ディシプリンは同じですから、２つの昔は分かれていた分野にまたがる、そのぐらいだったらある意味。理系・文系分かれてしまうと、それは全く違う両方にまたがって分かれていったという感覚ですけれども。

江淵　例えば、センターの大学院生の教育なんていうのは、もう本当にそれぞれの分野をまず究めるというところ、それがスタートラインだと思うんですけれども、割と広い視野を持たせるような取り組みというか仕掛けというか、そういうのというのはあるんでしょうか。

岡　日常的には、協力先の研究科の組織の中で彼らは研究しているんです。ただ、場所はこの建物にあるんですね。彼らがちゃんと学位をとれるようにするためには、やっぱりディシプリンをちゃんとやらなきゃいけなくて、そこで妙なまぜものをするとかえってやばいというのがまず基本にあると思うんですね。そのことを押さえた上で、理系から文系、かなりいろんな分野の先生がここにいて、ここでほぼ同居している状況にあるので、接しやすい部分があるんですね。我々としてはそれをむしろプロモートしたいところがあって、年に１回、学生交流会をやっているんです。これはそれぞれの各研究室から学生を出してもらって、発表会をさせるんですね。そこに全ての分野の学生が集まりますから。最低限の効用としては、相手が何をやろうとしているかわかる、どういうことをどういう形で問題にするのかを見る機会になるというのがまず大きいですね。多分、文学研究科で歴史だけやっていたら絶対見ない、レーダーの発表なんて聞くこともないでしょうから。例えば、ポスターセッションというのが理系でやりますよね。文系では余りないんですね。ポスターセッションで発表になるのというのが文系はまず疑うと思うんですけれども、そういう発表がある。１枚のこのぐらいの紙の中にちゃんと研究のテーマが書かれている。ああいう技術があるんだということも見る機会を持てるというのが非常に大きいんですね。ただ、やっぱり学生さんはそれぞれの専門をちゃんとやってくださいというのが基本的なスタンスです。

高倉　今のに補足するようなことですけれども、歴史学だったら歴史学、人類学だったら人類学の中でも学際的なことに関心を持ちやすい研究テーマとそうじゃない研究テーマとがあって、例えば文化人類学でも、このセンターの中にはもう一人、瀬川先生という中国の社会組織というか、親族組織とかそういうことをやっている方がいるんですけれども、そうすると、彼の研究というのは現在はどちらかというと移民問題が絡んでいるんですけれども、非常に社会のあり方とか道徳とか制度とかということに関心がいくわけですけれども、私はどちらかというと第一産業、生業をやっていますので、そうするとやっぱり土壌が物質的にどうでき上がっているのかというのが結構、生産にかかわっていたりして、そういう例えば大学院で環境科学にいて何か微生物を使った浄化システムみたいなものの、微生物が実は別な条件だと違うふるまいをして、実はこの農作物に影響を与えるというのを、それは結構おもしろいなと思うんですよ。でも、同じ分野の研究者に、これおもしろいねと言っても、どこがおもしろいんですかみたいな感じがあって、そこは本当に難しいなというふうに思います。

ただ、一般的な意味でいくと、さっき岡先生が言われたように、ポスター発表もそうですし、極端に言うと人文系の発表だと問題意識、先行研究、方法、結果、考察という、そういうプロセスを経ないで研究の発表をしていく場合もあるわけですね。資料をどういうふうに読んだかみたいな。そうすると、学生にとっては、全然違う自分たちの研究の組み

方があって、発表の仕方があって、考察の仕方があってということはある意味では刺激になると思うんですけれども。ただ、それはじゃあ、地域研究だからかというと全然そうではないわけで、多分今、東北大だけじゃなくていろんな大学の中で行われている院生同士をいろんな形で集めるのは幾らでもありますから、そういう中でも多分可能なことなんだろうなというふうに思います。

岡　どういうふうな形で彼らに役に立っているかとか、なかなか明確にはかることはできないですね。

宇野委員長　今のお話を聞いて思ったことですが、私自身は歴史学の研究者ですが、自分が持っている学問的なディシプリンの強みや弱みをわかっていることが必要であると思っていて、例えば、歴史学には弱みがあって、史料批判や史料を読むテクニックは非常に発達しているのですが、実際に人間の社会をどう理解するかということについては、基本的に理論を持っていないのです。だから歴史学者は、他の分野から借りてきた理論に拠らないならば、各自が勝手に自分の見方で見ているだけというところがあります。そのような自分が持っているディシプリンの強みと弱みを理解する必要があって、弱みの部分を他の研究分野からうまく借りてくることができるとか、そのような点で狙い目を持っていると、学際的研究がもう少しやりやすくなってくるかと思います。必ずどの学問分野にも強みと弱みがあるかと思いますが、それは意識することは、学際的研究を進める上で、１つ大事なポイントかなと思っています。

岡　どういうテーマを選択するかということが重要で、本当に歴史オンリーのテーマもあればほかの分野の情報が必要なテーマもあるわけです。ある意味ではそういうテーマを選びやすいような環境というのがあったほうがいいのかなという気がしますね。本当に文系・理系、例えば数学の知識を　　人文系の学生がちゃんと身につける、本来総合大学ですから身につけなければいけないんですけれども、それを本気にやろうと思ったらもっと中等教育の段階から、文系・理系を分けるところでちゃんとやらないといけない。それを大学がうまく引き継いで専門教育に結びつけるというところがないとだめですよね。欧米なんかではやっていますけれども。こうなると大学以前かなと思います。これはうちのセンターの話ではありませんけれども。

堀江　センターとして、プロジェクトとして、それぞれのディシプリンなり専門分野に応じた論文の成果に対して、広くユニットとして、もしくはプロジェクトとしてそれぞれどう位置づけできるのかというのが，僕はプロジェクト・リーダーのマネジメントだと思うんです。個々の研究者に自分の研究の学際性のマネジメントをしろというのは、若手研究

者にとっては特に厳しい話だと思うんです。だから、全体どういうふうに学際性をマネジメントしていくかという課題が，ユニットに求められているのはないかなと僕自身は思っています。

宇野委員長　ありがとうございました。

時間がもう大分迫っておりますが、最後にお話しいただければと思うことがあります。この研究センターの強みは何かと考えた場合に、１つは文系理系両方の研究者がいるということ、それから、東北の震災後に震災関係の研究が１つ新しい研究テーマになっているということ。もう一つあると思っていて、ロシアとモンゴルと中国という旧社会主義圏の３つの地域を視野に入れている研究センターは少ないので、その点でそれを強みとして活かせるところがあるのではないかと思っています。でも、報告書を見てみると、それは余り強みとして出てきていないように思うんですね。社会主義圏が崩壊した後、地域が激変していく中で、３つの地域を視野に入れているセンターとしての強みというのがあるような気がするのですが、これは堀江先生、いかがでしょうか。ロシアと中国とモンゴルにかかわる研究者がそれぞれいて、研究としては 20 世紀初頭の研究や 20 世紀前半の研究があり、社会主義時代全体を見ている研究者もいて、また、歴史学者、言語学者、人類学者など幾つかの分野の研究者がいて、その強みというのがどこかで生きることがあるんじゃないでしょうか。

堀江　社会主義の経験があるからこそ、社会主義崩壊後の激変を研究する移行論というのがあるのですが，逆に、歴史研究が強ければソ連崩壊後以降の問題について余り関心がなくなってしまうんですよね。現代の人間にとっては移行の問題だから，じゃあソ連時代はどうだったんだという議論ができるんですけれども、歴史研究ならば，移行そのものが余り課題ではなくなってしまいます。それはやっぱり歴史研究をやっている方と現代をやっている方の違いでしょう。その意味では、ここのセンターの研究からはその移行の問題とかソ連崩壊以後の社会の激変の問題というのは関心が薄いのかなと。直感的な印象ですが。

岡　宇野先生がおっしゃったロシア、モンゴル、中国をやっている人がいるという面では、20 世紀ロシア、中国の共同研究は１つの形としてユニットになっています。中国史をやっている人とロシア史をやっている人が、ソビエト史ですね、一緒に物を考えようとしている。成果はこれから出つつあると思うんですけれども。それは１つの形かなと思って。そう集まることに抵抗がないんです。ただ、どうしてもロシア史の中、あるいは中国史の中だけ見ると、相手のことはどうでもいいような感じになってしまうんですね。

さっき東洋史と西洋史が１つになっているというお話がありましたけれども、やっぱりまだ東洋研究と西洋研究の壁は高いんですね。歴史もそうです。東洋史と西洋史の壁は非

常に高くて、要するに使う資料、言語が使うんですよね。ロシアというとロシア語ですけれども、中国をやっていると漢文なり中国語となってきて、その両者を勉強する人というのはまだまだ少ないと思うんです。そこはやはり、先ほどの学際研究と同じことですけれども、相手方のことは相手方をやっている人と一緒に座ることで何か次のステップへ進もうということにならざるを得ないんだと思います。多分、近未来的には両方やる人もどんどん出てくる、言葉としても資料、言語、両方使える人も出てくるんじゃないかと思いますけれども、まだ高い。

堀江　だからこそ、岡先生と僕が一緒に現代的視点と歴史の視点と両方入れながらこの地域で科研研究をやってみようというのは、もともとそういうような発想がありましたね。

岡　何度かシンポジウムをやってそういう試みをやっていて、ロシア、西洋をやっている人と中国をやっている人と、１つのシンポジウムで発表してもらってお互いに議論してもらう。そうすると、おもしろいのは、やっぱり国境を越えちゃうと向こうのことは何も知らないんです。全然わからないですね。相手の話を聞いて初めてああそういうこともあるのかということがわかって、そのときは貿易問題だったんですけれども、貿易という枠組みでは私も関心を持っているので、ただ、国境が邪魔になっている。学問分野でも違うものになってしまっていて関心が向かない。そこは集まる場をつくるみたいな、プロモーターみたいな作業というのが必要になってくるのかと。

高倉　理想的にはやっぱり、大学院教育の中で多少なりともそういう枠があるのが多分最も理想だと思うんですね。やっぱり、先ほど環境問題というのは１つの連携ですけれども、社会の制度の話と人の行動の話と、それと環境そのものの問題というのがかかわって、そのことをやる学生は何らかの形でフィールドに関心を多少なりとも持つはずだと思うんですね。それがやっぱり現状ではなかなかうまくいっていないというのが正直なところかなと。やっぱり旧ソ連、ロシアにしても中国にしても一国がかなり大きい場所で、多様性が本当に民族的にもありますし。そうすると、ロシアに関心がある人が、あるいはロシアで自然観測をやっている人たちがロシアの制度とか歴史には多少なりとも関心を持つとは思うんですけれども、じゃあそれをモンゴルと中国でやってやるというと、何かそこの壁が逆にすごく高いなというのは文系ですら感じます。そこは、これはもし大学院の仕組みで地域研究科で理系も一緒に入れてやるような仕組みがあればまたもう少し別だと思うんですけれども、なかなかそこは現状としてはうまくいかなかったというか。その部分が先ほどの若手の育成とかということにも。もちろん若手の育成で一番大切なのはディシプリンだと思うんです。

岡　ディシプリンの違いではなくて。ただ、ディシプリンの違いと似たようなものかもしれません。ただ、文理に比べたら乗り越えは可能な分野、領域ではあると思います。そういった部分では、フィールドの違いから来るそういった壁というのは、こういううちのセンターの中にいると割と見えてくることがあるので乗り越えは容易かなと思うんです。モンゴルをやっているうちの学生はロシアをやっている学生と日常的に交流しているので、相手が何を考えているかわかるし、たまには相手の研究発表も聞きますのでそれは可能であると。だから、文理ほどの難しさは多分ないと思います。

それから、もう一つ、先ほどまた、話が戻りますけれども、高倉先生のユニットみたいなやり方もあるんです。ふだんはアジア経済学をやっている人が日本をやる。地震なり災害というモチベーションがあるからですけれども。そういうやり方も１つあると思うんですね。

堀江　文系のほうの地域研究という分野に関しての若手研究者の育成に関しては、分野横断的に地域研究として教育していくのも１つだと思うんですね。それは、地域研究をやる上でそれぞれもともと学生が持っている基本的な課題というのに対してどういうような専門分野から接近していったほうがいいのか、地域研究は本来，ディシプリンよりもまずは課題優先ですので、どんな研究にどんなアプローチが必要なのかというのを学んでいくプロセスというのが若手にはどうしても必要になってくると思います。地域研究者育成には、やっぱりこういうセンターが担っていくべき部分というのは当然あるでしょうし、センターの活動を通じて様々なアプローチを学ぶ機会というのを提供していくということ自体が非常に大きな意義があると思います。

岡　地域研究というディシプリンはおっしゃるようにないんですね、これは。ディシプリンではなくてテーマ、課題をどの分野から取り上げるかということはあっても、地域研究自体を目的にするということにはならないだろうと思うんです。だから、やっぱり学生さんたちにはディシプリンを身につけてもらわないと困るわけですね、実際に使えないので。中途半端の専門家になってもしようがないですから、まずはディシプリンをベースに。ただ、ディシプンの外側を見るような機会は常に提供しておくということが大事だと。そういうときに、モンゴルで何かを問題にしたときに、その学生さんが勉強した例えば人類学や人類学の方法がそこで使えますよという話になって、プロジェクトとしてはそれが成立するでしょう、学際的にも成立するでしょうという形になっていくんじゃないかなとイメージしているんですけれども。

宇野委員長　それは、ある大学院生が最初に歴史学を勉強したけれども、人類学を勉強したいと思えば、そういうことが可能なんですか。

岡　制度的には可能です。

宇野委員長　さらに、例えば、歴史学を研究していた人が火山の勉強をしたいと思ったときは、根本的には無理かもしれないけれども、あるところまではできるんですか。

岡　専門課程でですか。大学院とか。

宇野委員長　歴史学を研究していた人が、火山のことをきちんと科学的に理解したいと思ったら、それは火山学の先生の研究室に入ればできるのでしょうか。

岡　環境科学研究科だと、指導教員とは違っていても別の専門家がいればその先生の指導を仰ぐことが可能かもしれないし実際にやっている人がいるでしょうけれども。例えば環境科学研究科の学生が理学研究科に行って指導を仰ごうとすると大変かもしれないですね。制度的な問題ですが。

宇野委員長　予定の時間が過ぎてしまいました。評価について大分時間をかけて話をしましたが、議論したこと以外では、国際交流は、センターとして大変力を入れていらっしゃいます。何か取り上げなかったことも含めて、ご意見がありましたらお願いします。

堀江　もともとこちらに来るときに用意していたことがあったんですけれども、取り上げたかったのは、ここの機関誌ですね。この機関誌は発展していくべきだと思うんですけれども、現状を考えると、学内紀要としてのイメージがあり，まだまだ一般投稿の可能な東北アジア地域研究の学術誌として目立っていないと思います。若手研究者にとっても，投稿先としてなかなか上がってこないという問題があると思います。その理由として，投稿締め切りから発行までが 10 カ月以上あるということと同時に，査読のプロセスが明確でないということが挙げられるように思います。どこの機関も、遅くとも３カ月というのを目標にして審査結果を出しているように思います。地域研究の学術誌は他にもありますし、学会もいろいろあります。その中で特にこの機関誌の魅力を訴え、より若手研究者にも配慮した形の発行を考えていかれるのが必要なんじゃないかと感じます。東北アジアという名前の地域研究雑誌があるということ自体は非常に重要なことだと思っているので、ぜひとも頑張っていただければと考えています。

岡　基本的にはオープンにしてありますし、査読もつけています。外部の査読者をつけていますので。やっぱり組織の雑誌というイメージが強いと思うので、外部からの投稿でちょっと仕組みが固く感じられるかなというのはありますけれども、最近、外部からの投

稿が増えましたね。

宇野委員長　ありがとうございました。江淵先生、何かありましたらお願いします。

江淵　特にないですが、単なる興味でお伺いします。共同利用、共同研究拠点になる気はないんですか。

岡　なる気はないと言うとうそになりますね。やっぱりそれの採択を得たいということはありますが、今まで何度かやって失敗しているんですね。２回ですかね。出し方が悪かった気はあるんですけれども、ちょっと振り回されたところがあるので。文理融合だとか文化遺産の研究とか、それなりに考えて出すわけですけれども。もう一つの理由は、共有拠点というのは、一番わかりやすいのは理系の設備を共有すると、オンリーワン的な設備があって、その設備を国中の研究者がそこに集まってきて使う、それが拠点化という概念ですよね。うちの場合、オンリーワンというので何を想定するかというのは非常に難しいんです。本のコレクション、中国の本のコレクションを持っていたってみんなで使えるわけじゃない、モンゴルの人には関係ないということになってしまうし。理系の機材はそれなりにありますけれども、それは別に文系の人が使うわけじゃないので、スキームが合わないんですよね。なかなか議論がされない。文系の研究機関も実は、彼らはむしろ研究会をやってそこで蔵書を使いながら人が集まる場ということでやって、それは文科省もそれでいいという言い方をしている。基本的に我々はそれで出すことになるわけですね。

ただ、やっぱり分野が広過ぎちゃって、あなた方は一体何の研究組織ですかと聞かれちゃうんですね。そこで、テーマを絞るとそんなテーマはほかでもやっているでしょうという話になっちゃうんですね。文化遺産のときはそうでした。文化庁系のいろんな組織があってやっているんでしょうとなっちゃって、おたくがやる理由は何ですかと。そのとき、逆に、何で東北大学でもっと広く出さないんですかと。それじゃだめだと言われたからそうしたんでしょうと言いたいんですけれども、ちょっと振り回されたんですよね。それでうまくいっていないところがあります。

今回、機構の枠組みを利用したのも、それに対する保障というかそういう側面があって、結局、機構もやっぱり複数の大学を束ねてネットワーク型の拠点をつくるということをやっているわけです。センターもネットワークがありますので、機構のほうを使って同じことが実現できるんじゃないかという、そういう考え方ですね。一応認められました。

江淵　実質的な活動からすれば、変なしょぼい拠点よりよほどちゃんと研究者コミュニティに貢献していると。今もう本当に、機材共同利用型よりは共同研究型ですね。我々の研究所ももう、そんなわざわざ来てもらって使ってもらうようなものはほとんどないんで

すね。ですから、共同利用するものは教員の頭だけ、それで十分多分いけるはずだと思うんですが。そこはいろいろ事情があるところだと思いますけれども。実際の活動としてはもう十分あれだと思いましたので。

岡　第３期の中期目標、中期計画期間中は、大学改革をどんどん進めていくと思うので、６年後に大学全体がどうなっているかわからないということがあると思うんですね。個々の大学がそれだけ１つ１つ自立的な状況が維持できるかどうかというのもわからないし、それはやはり、大学共同利用機関も同じことですよね。あちらも整理や改革で十分なので。ちょっと６年後にどうなっているかというのは今、すぐに判断しがたい。ただ、統合の方向は間違いなくて、ふえることはよほどの分野じゃない限りないでしょうから、そこは一定の方向性は得ていると思うんです。その方向性に沿って次どうするかということを考えるべきだと思うんですね。

宇野委員長　時間がオーバーしてしまいましたが、この座談会を踏まえて、それぞれ各自が評価をまとめればよいのでしょうか。

岡　はい、お願いします。

宇野委員長　今日、将来構想までは議論できませんでしたが、将来構想をセンターとして打ち出すことはされないのでしょうか。何かの委員会の中で議論してセンター内で将来構想をつくり、それについて外部評価委員会で意見を出してもらうということはされないのでしょうか。

岡　文書にした形では余り出していませんけれども、今回の拠点形成のこのあれもそうですよね。単独で今、拡大するという線は絶対ないということなので、ほかの組織の皆さんと協力しながら実質的な拡大をしていくというところが戦略なのかなと。前回の外部評価の例で言えば、要するに今、センターが持っている問題点を踏まえてこういうふうにしてほしいというような要求を出すみたいな形で。ご要望を出していただければと。

岡　今、間違った方向に進んでいるよということでも結構ですけれども。

宇野委員長　まずセンターとして将来構想を出して、それを評価してもらう方がよいのではないかと思いました。あるいは、外部評価委員会ではいろいろなことが出ますので、それを踏まえて将来構想としての方針を出すということはあった方がよいように思います。ただ、外部評価ではいろんなことが出ますから、それを全部取り入れる必要はなくて、そ

の中からこれとこれは活かしてこのようにしたいということを将来構想として出していくことになるでしょうか。今回は、外部評価委員が将来構想を書くことになっているようですので、そのようにお願いします。

宇野委員長　以上、雑駁な司会でしたけれども、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

岡　本日は３先生、遠いところをお越しいただいて、お忙しい中ありがとうございました。非常に有益だというか、非常に刺激的な議論ができたと思っております。今後、ご指摘いただいた点を生かして、センターの将来構想につなげていきたいというふうに思います。なかなか組織にかかわるとすぐの実行は難しいですけれども、次の中期計画書、あるいは次の外部評価あたりを目指して工夫していきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

東北大学東北アジア研究センター外部評価報告書

編集：東北大学東北アジア研究センター評価データ委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576　仙台市青葉区川内４１
センター長・岡洋樹

2016年10月31日発行
無断転載を禁じる。